

淨

土

又舍利弗

おれがけ

の國

土に

樂

黄金と地

とせりうち

時

はまゝんたら

花と樹

はくは國

衆

つゝ祿

やうたん

おれ

えいこゝとてりう

け

て他方十萬億

長

はくは

4

はくは

◇仕奉後銃・久持忍堅◇

◎一圓の淨財・一年の慰問

君國のために身命を賭した白衣の勇士達は今や到る處に戦傷を癒し、病苦を養ふておられます。これ等の方々に心の糧として吾等が誇りとする、信仰の伴侶雑誌「淨土」を贈つて法味を愛樂して頂かうと思ひます。何卒この聖なる運動に速時參加して下さい。

病院
慰問
白衣の勇士に法味を捧げよ

◇全國陸海軍病院の全部へ毎月三十部乃至五十部の雑誌「淨土」を贈呈して白衣の勇士達に法味を捧げた
いと存じます。

◇御一人一圓の淨財を御喜捨下さい。一年間毎月雑誌が病院へ参ります

◇毎月五千部は是非入用です。五千人の有志者が必要です。御奮發下さい。

◇個人でも、團體でも、亦金高が一圓以下でも結構です。兎も角この聖き運動に隨喜參加して下さい。

◇御送金は淨土宗務所事務宛に！ 領收の證には宗報誌上に御芳名を掲載します。

◎一冊の淨土・一生の歡喜

脂肪好きの人は

ビタミンAを補はないと
動脈が硬化し頭が禿げる

寒くなるにつれ、脂濃い食物が多くなる。天ふらだ、牛肉だと味覚を満足させるのも結構だが、脂肪を多く攝れば喜ぶほど必要なのが、ビタミンAである。ビタミンAは脂肪の圓滑な新陳代謝に絶対に必要な要素であるから、若し脂肪を過食してビタミンAを補はないと健康上有害である。即ち過剰脂肪が沈着して、所謂脂肪肥りになったり、血管に脂肪がついて、動脈が硬化して、血圧亢進を招き、腎臓肝臓にも故障を起す。また血液がアチドーシス（酸過多）になつて全身の倦怠を覚えたり、脂肪過多から若禿したりする。處がビタミンAを併行して補へば、脂肪は豊富なエネルギー源として有意義に利用され健康増進する。ビタミンAの補給には定評ある理化學研究所のVA製「理研ビタミン」が推奨される。「理研ビタミン」は純粹のビタミンAとDをグロビール球に包んだ強力製剤で、一球中に實に七七〇〇國際單位即ち鰵肝二十五個分のビタミンAと更にDが濃厚に含まれてゐる。朝夕一球宛吞めば充分である。

理研ビタミン
包裝

四拾球入 百球入
五百球入 千球入

他に小粒製品あり
藥店にあり



店商置玉社會式株 販大京東 店理代總



◇浄

土

第五卷
第十號

十月號

目次◇

扉・目次カット

鷹山 宇一

時局下の佛教徒に望む

牧次郎

(六)

非凡な平凡

池田立基

(七)

大陸往來

廬山紀行
西瓜の種

服部覺善
野島宣道

(二六)

(二七)

巡錫
報告

北海の同信と結ぶ

佐藤賢順

(二五)

隨筆

鳴く虫の秋
小笠原島

町田徳治
岩野喜久代

(三)

(二八)

信

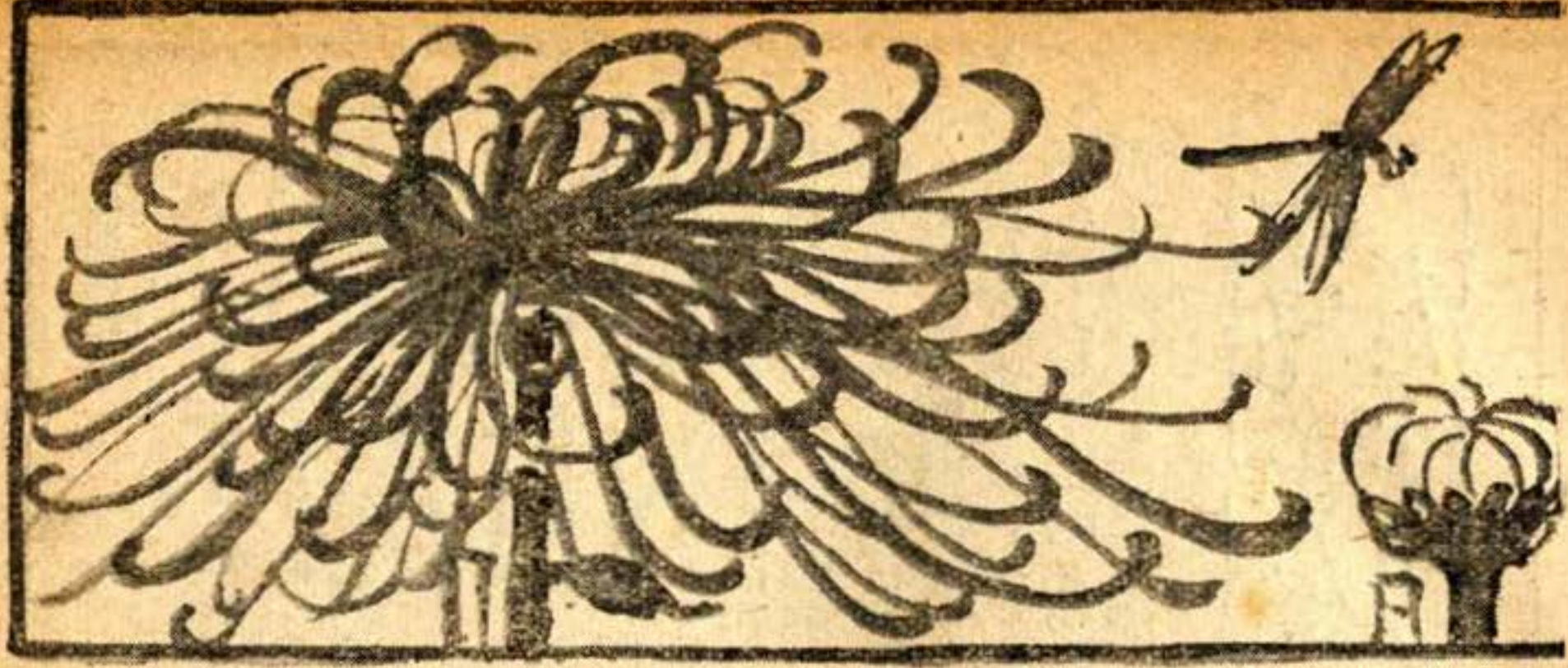
仰

相

談

中村 辨康

(二九)



小説 武士日雇(中二島)……………小島健三(三)

童話 里子ちゃん(清藤)の夢……………大戸喜一郎(四)

漫畫 自慢のお父さん……………田村辰三(三)

坂根翁のこと……………吉田絃二郎(三)

征旅の回想……………安田秀賢(三)

歌壇……………與謝野晶子選(一五)

俳壇……………太田耳動子選(三)

日常動作式解説 如來様の子になつて……………中村辨康(五)

讀者の聲……………(五)

鑽仰運動ニュース……………(五)

編輯後記……………(五)

◇淨土第五卷十月號目次◇

江藤先生へ

東京 中村 安子

○ 本日は浄土お送り下さいまして有難う御座いました。殊に出征中の良人のことや、数ならぬ私のことまでおのせ下さいましてほんとにうれしうございました。航空便で戦地へ送りました。あの細い目をニコ／＼と笑つて読んでゐるだらうと察します。こんなこと申しでは失禮ですが、さすがは数多の憐める者を御佛の力で御済ひ遊す江藤先生です。良人中村をほんとうによく御觀察遊してゐらつしやるのに驚きました。(中略)永久に浄土の愛讀者になります。

鳥取陸軍病院 小吉 重子

○ 一昨日浄土誌を御惠送賜りました。本當に有難う御座いました。拜讀致しました、例の千切大根のありましたのには一同爆笑致しました。折角の御厚意を大變嬉しく院内廻覽と致しまして、一般患者の皆様へ廻して拜讀させてゐます。

注文二三

朝鮮 大田 雲山

○ 去暮思ひつきしより今日まで漸く購讀者七十餘を數へ今後も随時擴張申す可く候。間編輯の充實望み居り候、別にさしたる意見も無之候も購讀者の意見を綜合するに、

○ 中村先生の勤行式の講義は歡迎され居り、今後も師の聖典講義、信仰相談に多くの頁をさかれんことを望む。

○ 紙の統制にて困難と存候も四月號の如き、六月號の如きより上質のものを選ばれては如何にとたとへ頁數を減されても。○ 各人時局多端の砌なれば極めて多忙のことにて記事もやゝこしきものより簡單なるものを喜び居る趣にて候。

和歌山深山陸軍病院 川崎廣光

○ 先般御依頼申上候所の雜誌浄土四部早速御送附相成り厚く御禮申上候、無味なる病院生活には仲々修養に相成り候。時局柄益々御多忙の事と御推察、御精勵の程希望仕候。

中村先生へ

愛知 宮崎清治郎

○ 南無阿彌陀佛。過日は突然、參上いたしましたる處。その不躰をお叱りもなく、御丁寧なる御歡待を蒙りまして有難く感謝いたします。

○ す。又長々と逗留なし念佛さして頂いた事も心に銘記して有難く、そののみか先生の御配慮により、心地よく念佛さして頂ける理想的なるお寺を紹介して貰ひましたる事は、それこそ「百千萬劫難遭遇」よくぞ我が爲にかゝる境遇の與えられし事よと、只念佛あるのみであります。幸に八木先生も折よく在宅せられ快くおゆるし下さいました。これも先生並に如來様のお蔭と思ひ、この心を念佛にふりむけて努力いたす決心です。何分にも教養なき野人の事として種々いたらぬ點もある事も思ひますが、この上もよろしく御指導下さるやうお願いいたします。終りに先生初め皆様の御健康をお祈りいたします。

○ 本欄への御投稿は可成ハガキにて御願ひ申します。(係)

浄土

十月號

月影の

いたらぬ里はなけれども

ながむる人の

心にぞすむ

法然上人詠歌





時局下の佛教界に望む

陸軍少將

牧 次 郎

曩の世界大戦後二十五年を経た今日、再びヨーロッパに大動亂が勃發し、第二次世界大戦の三番叟が演ぜられつゝある。これに對して我が帝國はこの渦中に不介入の態度を明にし専ら支那事變の處理に邁進すべきを中外に聲明した。

この聲明を俟たずとも、帝國としてはあらゆる分野、あらゆる角度よりこの事變處理に國家の總力を傾注すべきことは論を俟たぬのであるが、既に歐洲に戦亂が開始された今日この機に乗して更に一層の努力を傾注し速かに事變の處理に一意邁進すべきは國民擧げての決意であらねばならぬ。

而してかゝる情勢の下に宗教の使命に立つ僧侶として、佛教徒として爲すべきことは何であらうか。

今日大陸に於ける政治、經濟、文化各方面の建設工作は着々進みつゝある。然し、これら各種の建設の中で政治的、經濟的

建設は勿論先決條件であらうが、何と云つてもその根基をなすものは精神思想方面の建設であると謂はねばならぬ。日支兩國民の精神的結合こそ根本であつて、各種の建設がこの基礎の上に立たなければそれは恰も砂上の樓閣たるに過ぎない。

而してこの日支兩國民の精神的結合の鞏固性と永久性とはどうしても宗教の力に俟たねばならない。しからば、この宗教の力による精神的結合は如何なる歩みを踏み出さねばならないか。

先づ支那民心の日本國民に對する一般趣向を検討し、これに對處して融合の手を差しのべる方途を講究すべきであると思ふ。

私は『支那民衆の聲』と題して將官講演會で聞いた旅日華僑聯合會々長の張則盛と云ふ人の講演の一節中特に宗教方面に關



係ある事項に就て御紹介をして参考に供したいと思ふ。

「中國民衆に容易く馴染む歐米の宣教師」と云ふ項目でかう云ふことを述べてゐる。

「歐米人は、私共中國の中産階級以下の民衆とすぐ馴染になる。即ち遠い國の人達とは却つて馴染が多くあつて近い國の人達とは馴染が少い様に思はれるのは一體どう云ふ譯であらうか。私共の國では田舎へ行くと二三百の人口の處でも必ずキリスト敎の教會堂があつて、少くも一週に一回は必ずそこにお詣りをし、牧師は色々と農民其他有らゆる階級の人々に説教をする、そんな譯で民衆は教會堂を中心に教師と馴染になるのです。そして宣教師から色々とお國の惡口を聞いても民衆はお國へ行つたことが無いのだから、宣教師の云ふことを本當だと思ふ。

それで日貨排斥の問題などもこの教會堂から製造されるものが非常に多いと思ひます、これは私が支那本國で實際聞いた事であつて間違ひのない事實で、これは歐米各國の一つの政策だらうと思ふのです。

近來お國の工業が發達して、お顧客をとられたものだから、日貨を買ふな、日本人にはかう云ふ悪いことがあると云ふやうに針小棒大に説き聞かせる、民衆はそれを眞にうけて、日貨排斥の尻馬にのると云ふ様なことになるのです。

我々はそれは間違つてゐると云ひ度いのですが商人のことだ

からどうすることも出来ない。教會堂を取締ると云ふやうなことも勿論出来ない。しかも地方の官憲は常に教會と接して親しくなつてゐるから取締りなぞと云ふことはやりません。そんな譯で親日家は極めて少ないのです。」

と云つておる。次に日本のお坊さんに對する中國民衆の非難を一つ述べると

「歐米各國の人は支那の田舎に學校を建てたり、また病院をたてたりして、極く輕い藥代で病人を治してやると云ふやうなことをやつてゐる。ところが、お國の本願寺とか日蓮宗などは上海などにお寺を建てゝ活動して居ります。私共はお國と宗教は同じてお釋迦さんとかお觀音さん、阿彌陀如來といふのを非常に信仰して居ますけれども、その本願寺や日蓮宗に中國人が入つてゐない。あちらにゐる人達はお國の方々ばかりを相手にして私共の國民に働きかけて居られない。我々の國のものゝ中には日本人と共通なところもあるが、随分違つたところもある。殊に生活程度は可成違つてゐる。それで中國にゐる日本の坊さん達は生活程度の低い民衆を相手にしないのではないかと思ふ。ところが歐米人はそうでない。さう云ふ民衆達と笑つて話をしてゐると云ふ有様であります。

列車などにも歐米人が支那人のボーイを連れてのり込んでゐるが、その支那人のボーイを二等にのせてゐるし、食事も一緒



にする。日支間が不和になる原因も色々あらうが、このやうなこともその原因の一つでありませう。歐米人は善人であると云ふ先入感を持つてゐるのに、日本人は對しては反對である。

この教會堂と云ふものは大切なものであつて、お國でも政府で補助をして、田舎に教會堂をたてゝ説教すると云ふやうなことをやる必要があると思ひます。

海外では中國人が優遇されてゐるかと思ふとさうではない。

しかし歐米人は善人なりと云ふ觀念が本土の民衆の中に行き渡つてゐるから排英運動などと云ふものがあつても、すぐ止んでしまふ。それに反して日本人に對しては一寸したことで直ぐ排日運動になると云ふ譯です。」

とからざつくらんに申しておる。勿論これは一華僑の言であるから全體的なものであるとは即斷出來ないが、民衆の一つの聲であることは間違ひのないところである。故にかゝる點を良く理解しておくことは大陸進出に處する大切な事柄であると思ふ。

歐米人、就中、牧師の支那民衆に對する態度は私が戰地で體驗した結果によつても、またキリスト敎の支那進出の歴史的考察によつても彼等が唱へてゐる人類愛のためと云ふよりも、自國愛とも云ふべきものゝために、第一線に立ち、教義のためではなく國策のために働いておるのである。これが果して宗教家

のとるべき態度か否かは敢へてこゝに問はない。

か様に支那に於けるキリスト敎徒の活動振りを見るとき、我が佛敎徒による宗教工作の上に省慮を拂ふべき問題であると思ふ。

キリスト敎を私は次の様に斷ずる。

これは要するに大陸に對する白人勢力の前衛であり。また政治經濟上の勢力の扶植、地盤獲得の出張所である。また軍事上に於いてはスパイ網の役割を果す情報機關の足場でもある。今次の事變でも戰場附近の教會堂の牧師が皇軍の作戦行動を蔣政權に内報するとか、また支那軍の防禦陣地を第三國の教會堂の附近に作らせ、我軍の攻撃に對する據點に利用してゐる等、我々に對する利敵行為は枚舉にいとまがない。

これらの事實に徴して、支那大陸に於ける基督教の存在は天津租界の問題の如く正に害我利敵の存在である。如何に租界問題を解決しても、キリスト教會堂が各所に存在する限り、それは宛も細胞的租界の如きものであつて、東亞建設上の癌となり排日抗日の温床をなすものである。

この非亜細亞的キリスト敎の存在を大陸から驅逐することは租界問題の解決と共に主要な問題である。而してこれを驅逐するには如何なる方策をとるべきか。

思想は思想を以て、宗教は宗教を以てすることが公明妥當の



途とするならば我宗敎界に於て之に當るものは有らゆる視野より見て佛敎を措いて外にないと斷ずるも不當ではあるまい。これこそ佛敎徒に與へられた興亞の一使命であると考へるのである。

東亞新秩序の建設は先づ以て日滿支協同體の完成が目標であるとしても興亞の大勢はこの範圍に止まらず其波紋はアジア全土に擴がるべき當然性があり、その胎動は各方面に始まつてゐるばかりでなく已にアジアの西部南部の諸邦はアジアの盟主日本に對して和親協同の手をさし延べつゝあるのが今日の情勢ではあるまいか、是に於て吾人は亞細亞大陸に宗教的存在の大をなす佛敎、回敎、キリスト敎の世界三大宗教と支那に於ける儒敎、道教、紅卍字會、安清同盟等の宗教若くは宗教類似のものが亞細亞大陸或は支那に如何なる作用如何なる動きをなしつゝあるかを検討して東亞の建設に佛敎徒の進むべき指標を定むべきであると思ふ。

今次事變の本質は日支兩國の戦でなく蔣政權の背後に動く顔の白人即ち英米佛ソとの戦と謂へよう。かの天津問題に於ける日英東京會談、ノモンハンに於けるソ聯の越境挑戦日米通商條約の一方的破棄等の如き、我に對する敵性を赤裸々に暴露した事實に依りても明瞭である。而して是等白人國は何れも基督教國である。支那に於る基督教の活動が已述の如き敵性を發揮

する所以のものを蓋し思ひ半に過ぐるものがある。特に彼等の屬領若しくはその勢力下にありてその桎梏より脱しその羅網より逃れんと苦闘しつゝある近東、中央アジア、印度、南洋諸邦の民族が回敎徒或は佛敎徒であることは大なる關心事であらねばならぬ。

抑々回敎徒は其數三億に上りその三分の二はアジア民族である。この回敎徒が東亞新秩序の建設に如何なる意義をもつて居るであらふか一瞥を試みるの要がある。

この回敎徒を民族外に見ればアラビヤ、トルコ、インド、イラン、南洋、支那系の回敎徒である。而してそれらの分布状態は支那方面に三千萬、ソビエツト方面に三千五百萬、南洋方面に六千萬、印度方面に八千萬、近東、北アフリカ方面に一億の回敎徒がある。この中でインド、イラン、アラビヤ、南洋系回敎徒は英國及その配下にある和蘭の支配下にありて對英上に、支那及トルコ系回敎徒は對ソ聯上に密接なる交渉を有するのであるが就中對ソ問題として考ふべきは滿洲國が獨立し、蒙疆自治地政權が樹立せられた今日これに連なる寧夏、甘肅、青海、新疆方面の回敎徒である。この方面の回敎徒は漢回、纏頭回と稱して最も民族意識の強烈なもので最近まで西北回敎國獨立の爲に闘つて來た反スラブ、反ソ民族である。然しソ聯の強壓に依り志士の多くは他に脱出し他日祖國復興の爲に待機して居る現状



である。而かもこの邊境がソ聯の援將武器輸送路であり赤化工
作の赤色ルートである關係から、どうしても支那西北邊疆を打
つて一丸とした回教徒より成る一大防共の鐵壁を形成すること
が考へられねばならぬと思ふ。更に對英關係から觀て印度、南
洋聯邦の回教徒及佛教徒の將來性を考ふる時特にビルマ、タイ
國方面の佛教徒が國內に有する力強き勢力を展覧する時、宗教
的作用が如何に事變處理の上に甚大なる關係を有つかは言を俟
たないのである。かの日露戰爭を訓期とし近くは滿洲國の獨立
或は今大事變に於ける正義日本の強大なる實力を望み見てアジ
アの日本に對する信頼と期待とは逐次其度を深め今や正に日本
を東亞の盟主と仰ぎつゝ亞細亞の復興乃至は祖國の回復を眼さ
して民族の曙光に向て如何に多大の希望を囑したるかは想像に
難くない所であり現に昨年代々木大山町に回教の禮拜堂が竣工
した際、イエーメンの王子フサイン殿下がその日落成式に參列
のため來朝せられ東京商工會議所主催の歡迎晚餐會に臨まれた
席上に於ける王子の後挨拶に依つても、東洋諸民族の心底に流
る氣持が良く看取されるのである。

「日本は東洋で指導的地位を占める強國である。我々は日本の
あるために東洋は滅びないと云ふ確信を持つてゐる。私共の日
本にかける期待は大きい、日本は東洋の盟主となつて、東洋民
族の復興と再生に努力してもらひたい。日本が昨日より今日、

今日より明日と強大になりつゝあることは、我々の喜びに耐え
ないところである。蓋し、日本が強大であると云ふことは、他
の東洋諸國が強大になると云ふことに他ならないからである。」
かくの如く回教徒が日本に大いなる期待を持つてゐることを
考へるとき、日本に於ける宗教の存在に於てその大をなす佛教
徒の使命が亦如何に大なるかを痛感するのである。

我が佛教徒は須らく回教徒が反西歐思想であり反ボルシヴィ
キ反スラブである事實の上に加ふるに我國商品の顧客であり、
更に其發展性に於て人口増加が幸か世界屈指の民族でありその
國內に埋藏する重要工業資源が無限である諸點より觀て大亞細
亞建設の協同體として力強き役割をもつことを深く認識し宗教
的協同提携の強調を觀念しなければならぬ。特に東亞新秩序建
設の機會は同時に日本大乘佛教の種を蒔いてくれた支那に對す
る我が佛教徒の報恩の機會でもあらう。而してこの世界の轉換
期に當りアジア否世界に淨土を建設するためにも、大陸に佛教
を還元することは我が佛教徒に課せられたる一大使命であると
共にそのことが支那に對する報恩であり佛陀に屬する奉酬であ
り佛徒としての臣節を全うする所以であらう。斯くて皇道佛教
の眞面目は發揮せらるゝのである。而してこの大陸還元と同時
に儒教の敬天、祖先尊崇、道教の因果律現世利益、紅十字會の
萬教歸一宇宙根源、安清同盟の日月星、天地人、儒佛道の精神



思想が佛教と一脈の交流を見出し得る點を善用且抱容して支那民心把握の妙諦を遂せざる著想が亦重視すべき點であらう。

以上は極めて概括的輪廓を描出したるに過ぎず甚だ不徹底の感があるが踏み込んだ點に言及する餘裕を持たぬ今日更に之を他日に譲り譲て脚下を凝視したいと思ふ。事變處理に於る國內統後の陣頭に立ち、國民精神總動員の役を買つて活動しある佛教徒の奮闘はさることながら苟も國民精神總動員に乗り出す以上は精勵に協力して活動する前に、先づ佛教徒夫れ自體の總動員が必要ではあるまいか。佛教徒の全體主義に徹するの必要があるのではあるまいか。

内に總動員なくして外に何んの成果を擧げ得やう。各宗派間の相剋摩擦の如きは末世的である。即ち淨土を念ずる佛教徒が内部の淨土を建設し得ずして、如何にして大陸に大なる淨土を建設し得ようか。私が佛教徒の末班に連なり各宗派に親炙してます／＼この感を深くするのである。

中峰國師が座右の銘として書かれた次の文字は正に頂門の一針であると同時に現代僧侶の座右の銘として三思服行すべき誠辭でなると思ふ。

末世比丘

形似沙門

心無慚愧

身著法衣

思染俗塵

口誦經典

心懷貪慾

晝耽名利

夜醉愛着

外表持戒

內爲密犯

常營世路

永忘出離

偏執亡想

既擲正智

今や時勢は推移し世界は一大轉回をなしつゝある封建時代鎖國時代は遠く已往の夢である。國家形態は更に進み國家融合、ブロック形態、民族形態、汎結合體に飛躍して居る。皇國は現にアジア的集團生活の實現に急ぎ血を流し巨額の財を惜まず血みどろの奮闘を續けて居る時封建時代の遺骸に執着し、鎖國時代の牙城を守つて蝸牛角上の爭でもあるまい、吾人は諸君と共に東亞新秩序の建設に佛教徒の佛教使命を究め十三宗五十六派の衆智を聚めて目標を確立し法燈の巨火を掲げて不惜身命大死一番一體となつて驚天動地の實を施行したいものである。



きりぎりす

鳴く蟲の秋

町 田 徳 治

丁度この拙ない文章が誌上に現れる頃は秋も次第に深まり夜はいろいろの蟲の音によつて彩られる頃となりませう。

私はただ自分の趣味で昆蟲を愛し、彼等に注意してゐる者であります。以下秋に鳴く可憐な昆蟲の音楽師たちの解説を試みてみたいと存じます。

今私が原稿紙に向つてをりますと窓外にはツクツクボウシやミンミンゼミが頻りに鳴いてをります。蟬の音楽は夏を代表すると言つても過言ではないと思ひます。蟬が

昆蟲界の音楽師の一團とすれば秋に鳴くさまざまの蟲たちは他の一團を示すものであります。

故人となられましたが農學博士横山桐郎氏には「蟲の世界を探ねて」「優曇華」「蟲」などといふ著書があり巧みな文章で色々の昆蟲の解説の智識を普及させようと努められました。その一つに秋秀麗音信士物語といふのがあります。これはある人がカンタン（邯鄲）を一匹飼つてゐたが段々晩秋になり既に餘命も長くはないやうに見受けらるから今までよい音色で樂ませてくれたこ

の蟲に雌を譲つてくれるところがないだらうかと博士に問ひ合せて來たので博士もこの人の心根の優しさに感激して下落合の蟲問屋を紹介してあげましたが幾日か過ぎて亦その人から博士の許に封書が届き「幸に蟲問屋で雌が手に入り二日ばかりは喜ぶやうな氣色であつたが遂に冷たき屍となつて終つた。この上はその妻を永遠に貴下の御著作の中に留めるに於ては彼も充分満足することと思ふ」といふ意味が書き誌され、秋秀麗音信士と書いた紙包の中に邯鄲が入つてゐたといふ物語なのですが、眞に優し

い心掛けの人もあると思ひます。博士はこの戒名の附いた蟲を大切に保存されたさうであります。

二

秋の鳴く蟲を大きく分けてみますとコホロギとキリギリスの二つになります。それからあまり音楽的とは言へないでせうがバツタの類にも鳴くものがあります。かんとん・すずむし・まつむし・くさひばり・えんまこほろぎ・かねたたき・等はコホロギの部に入りきりぎりす・くつわまし・うまおひむし・つゆむし・などはキリギリスの仲間であります。

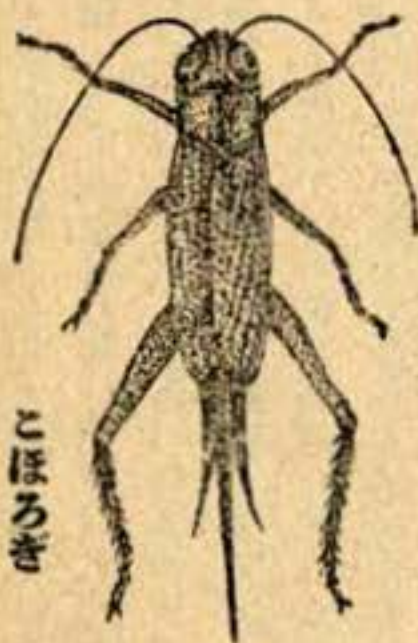
前に書きました横山博士の蟲の世界を採ねてといふ本の巻頭には『秋の夜を賑す蟲界樂人の演奏會』の口繪がありましたまつむしがマンドリンを、すずむしが木琴を、かねたたきがトライアングルを、えんまこほろぎがトロンボを、きりぎりすがヴァイオリンを、うまおひむしがセロを、各々彈い

たり吹いたりし、そしてくつわむしがタクトを揮つてゐます。この他に同博士は銀笛の天才としてくさひばりを、フリュートの名手としてあをまつむしを擧げてゐられますが、先づこの十種類が秋の蟲界樂隊の代表的樂手でありませうと思ひます。

それらの一種類づつを擧げてみると大分長くなりさうですから別の機會に譲つて頂くことにしてここでは二・三のものに就て少し書いてみませう。

あをまつむしは九月上旬頃、桃・櫻等の樹上でリュウ／＼と高い聲で鳴く緑色の美しい昆蟲で、明治四十年頃支那から或は南洋からか卵が樹に附着して我國に渡來したもので東京附近には既に土着して繁殖してをります。桃や櫻の葉を喰べるので害蟲とされてゐます。支那の西湖畔には無敵にゐるさうであります。日比野士郎といふ人の書かれた吳淞クリークといふ實戰記の中に「あるときは敵の眼をしのんで眞夜中の

軍工路を背襲の重みに齒をくひしぱりながら行軍して行つた時、ふいに黒々とした楊柳の梢からりいりい——と震いつくやうな聲で鳴きだした青松蟲の聲を聞いた」と書いてあります。私の庭にも澤山鳴きます。かねたたきは十耗位の小形の蟲で、囀聲はチンチンチンと丁度小さな鐘でもたたくやうです。西瓜の種を少し小さくしたやうな蟲です。うまおひはスイツチヨとも呼ばれますが姿や聲に似ない凄じい蟲で共喰をします。共喰をするのはこの蟲に限らずコホロギ類の殆んどがするので、鳴く蟲は申すまでもなく雄であります。あの美しい聲で雌を誘ひし繁殖行爲が済むと雄は雌の獲食になつてしまふのであります。雄は



こほろぎ

雌のために犠牲となつて雌の榮養を増し子孫を殖やすのであると説明してゐる人もあります。東京市近傍にはギリギリス類は二十種類、コホロギ類は二十三種類位置することになつてゐます。

三

大歌人であつた故若山牧水氏はこほろぎのことを次の様に書いてゐられます。

『薄の花を蟲にたとへたならば先づこほろぎではあるまいか。さほどに際立つたものでなくサテいつ聞いてもしみ／＼させられるのはこほろぎである。』

わがねむる家のそちこち音に澄みてこほろぎの鳴く夜となりけり

こほろぎのしとどに鳴ける眞夜中に喰ふ梨の實のつゆは垂りつつ

使ひ終へてしまたてかけしまた板の雫垂りつつこほろぎの鳴く』

また馬追蟲を詠んだ。

やすらかに足うちをばしわが聞くや蚊帳

に來て鳴く馬追蟲を

めづらしく蚊帳に來ていま鳴き出でし馬追蟲の姿をぞおもふ

家人のねむりは深し蚊帳にゐて鳴くうまおひよこゑかぎり鳴け、

といふ短歌も「秋草と蟲の音」の中に出てをります。古くから、鳴く蟲は日本人の優美な感情と深く結びつき短歌に俳句に數多く扱はれてをります。大陸の戦線で奮闘されてゐる皇軍將士の方々はきつと草むらにすたく蟲の音に故國の秋をしのんでゐられるでせう。靜かな今晚もこほろぎの鳴音が早くも秋の來たことを知らせてゐます。

十四・九・一 品川にて稿

前號『夏川を……』の句に就いて

耳動子

『夏川を渉る嬉しき手に草履』と云ふ九月號の入選句に就いて諸氏からの御教示がありましたので一言御答へ申し上げます。此の

句の入選以前に『夏川を越す嬉しきよ手に草履』と云ふ蕪村の句を思ひ出してゐたら恐らく問題にはならなかつたでせう。此の點重々選者の不明を深謝致します。

さて此の二つの句の優劣に就いては、蕪村の句の方が劣つてゐると思ひます。蕪村の中七字は非常に上品で、落ち付いてゐるが、人ごとのやうに、よそ／＼しい表現となつてをり、其の爲めに反つて下五の輕快さに釣り合はず、更に『越す』は此の場合、常識的には『渉る』と解すべきであるが、其の他に『飛び越す』、『舟などによりて渡る』と解されたる憾があります。『渉る嬉しき』の方には此の缺點はなく、『下五の輕快な心持を助けて、リズムミカルでさへあります。只、創作ではないことを如何せん。

次に人口に膾炙してゐる句や教科書の句は必らずしも優れたものばかりではなく、中には間違つて採用されてゐると思はれる句もあります。それは純眞な優れた俳人が参考したものではないからで、例へば『朝顔に釣瓶とられて貰ひ水 千代尼』のやうに。



京都陸軍病院 吉岡 峰 月

子ら三人妻が貧しく守れるに凱旋
運れわれ未だ病む

評 貧しき妻子を持つ白衣の男子の儂ら
ぬ焦燥の心を歌つたものとして同情
に堪へない。

長野縣 山崎 志津子

指先に残る桑の香なつかしみ洗へ
ば涼し夕月の出づ

評 牧歌的情緒のなつかしく溢れた作。

京都 永田 七郎

苦しみを静かにわれの受くる時樂
しき種となるぞ嬉しき

評 克己修養の志す人にとつては苦しみ
もまたおのれを玉成する石の役目と
なるであらう。

南支那道軍 古川 喜作

天心に月隈もなし匪を追ふてこし
この丘上夢にかあらん

中支那道軍 山尾 泰正

城壁に歩哨に立てばクリークに夜
明けの星の影うつる見ゆ

和歌山縣 松尾 察道

己が死を兵に召されし子に秘せと
云ひて逝きます母の尊し

東京 森 戸 馨

身を立てて兵士とならん六尺のま
すらたけをは今ぞ立たなん

(徴兵検査の日)

香川縣 荒木 はち

我が思ふ兵士に似たる寫し繪と心
をどりて新聞を見る

栃木縣 大 輪 清

村郷に白衣の勇士二人来て、秋の
夕の風に立つなり

東京 小山 靜念

落葉松の林を包む朝霧のやがて晴
れ行く山の朝かな

大阪市 松尾 いくよ

電柱に軍務公用と書き出す親の心
をしのび見るなり

小樽 中村 茂雄

召され行く子は子にあらずすめら
ぎのみ國の子なり雄々しますら男

山口飛少尉に 福岡縣 三浦 壽子

陸軍も今は悲しき葉がくれの武士
はソ満の國境に死ぬ

小樽市 平井 善重

父母へ苦しきことは露云はで勇む
將士の心床しき

福岡陸軍病院 佐野 正樹

あせらじと云ひつつ焦るわが心岩
手の山のむらさきを見つ

小樽市 米室 凡子

逆境に堪へざる己がたよりなき心
捨てたく思ひけるかな

青森縣 丸尾 傳山

天地の恵みに伸びる青田見て佛の
慈悲を思ふ今日かな

東京 奥山 政

み名呼べば道を示して行てをば照
させ給ふ力強さよ

小樽市 中村 もん

波がしら騒ぐ沖べを黙しつつ船待
つ人の心忙しき

埼玉縣 小濱 清秋

大いなるめぐみに生きて貧しくも
今日のたつきをたのし終りぬ

北海道 花田 順佳

敵艦を陥し入れしと聞きたびに悲
喜こもこもの我が思ひかな

長野縣 宮澤 榮子

葉がいとう薄に添へて活けにけり
召されし夫子の書齋かざると

秋田市 藤崎 祐雄

好物の甘納豆を今日も買ふ戦線に
ある兄に送ると

大阪 佐々木 美緒

日の丸の旗にむせびてわが友はし
このみ櫓と今宵出で立つ

京都 福島 幸治郎

炎熱の眞夏に病みて臥す人を思へ
ば嬉し恙なき身は

大阪府 花田 道郎

短夜のいまだ明けぬに病院の坂登
りくる自動車のあり

投稿規定

官製はがきに一回二首以内
とし「淨土」編輯部歌壇係
あてに送ること。

中支
後軍

廬山紀行

服部覺善

宿に歸れば、内地から來た初客の僕に内地の話を開かうとも思つたのでせうか、憲兵隊の隊長と上等兵殿とが僕の歸りを待ちわびてゐた。夕食を喰み乍ら内地の話など雑談に花が咲いて遂に十一時近くになつた。

七月廿日 靜かな朝、小鳥の啼き聲に故郷の夢破れて疊の上、布団の裡にあるのに氣付いた。立ち上つてカーテンを開いて見ると、松の小枝をとほして青空が見えてゐる。今日は元氣だぞとドアを開け露臺に出る。椅子に寄り掛つて眺める東の牯牛嶺・濃紫西に位する女兒城の山々がコバルト色をして靜かに明けゆく姿は深山ならではの味は、れぬ獨特の

氣持である。霧の切れ間に大きな燧突の如きものが見える。まだ醒め切らぬ眼を擦り乍らよく見れば塔だ。而も塔の上に兵隊さんが居る。銃剣をかくへて東の空を睨んでゐる。明けるにつれて日の丸の旗が高く揚りくのまで見えて來た。私共が安らかな故郷の夢を食つてゐる間も兵隊さんは護つてゐて下さつたのだ、感謝と感激とがこみあげてくる。

鳥の啼き聲は急に騒がしさを増した。カウ・コウ・山鳩・目白・名も知れぬ小鳥、谷間の奥でうぐひすの啼聲はせゝらぎの音を加へて内地の深山で聴く交響樂の趣である。山家で生れた私には故郷の山里の情緒をしのばす



廬山大林寺附近

には居れなかつた。夜明けに、ツグミをとりに行つたこと、目白をつりに行つたこと、高い山を越へて學校に通つたこと、松林の中で亡母と一緒に松茸を探したこと、とりとめもつかぬ昔の思出が次から次へと續く。

何時かまた晴天も霧に包まれてしまつた。部屋に入つて書疊の上をぐる／＼と歩む、右へ左へ、行つたり來たり、誰か見てゐたら氣遣ひと思つたやう。また今考へても確に氣遣ひにちがひなかつた。素足で疊の上を歩く

廬山の守り



のも、内地と同じ様に布團の上に寝ることも實に云ひ知れぬ良い感じだ。二年も三年も疊の上を歩いたことのないあの兵隊さん達、これを見たり聴いたりしたらどんなにうらやむことであらう。

食事と呼ばれて食堂に行つた。オミツツケにコウコ、なんと喜ばしい待遇であらうか。

昨日の苦力を連れて東林寺に出發することになつた。また軍司令部に行つて別れの言葉を述べ、通行證を貰つて愈々下山することにした。日ノ丸辨當・水筒・それに大きなステッキと云ふ出で立ちで姑嶺の町から大林寺を左に見て、いつか牯牛嶺の頂上に出た。大きなトーチカが右に左に、そして番小屋に鐵條網が張りつめてある。鐵條網には多くのアキカンが吊るしてある。番兵に通行證を見せた。これからどちらへ行くかと問はれ、東林寺に下り蓮華臺に出るのだと答へると、君一人で行くのかとまた問ふ。いや苦力と二人で行くと云へばこれから蓮華臺までは兵隊は居ないのだ、氣をつけて行かぬとアブないぞと云は

れ、先を知らない私にはたまらない不安を感じた。だが、廬山に來て東林寺に詣らなかつたら來た甲斐がないと心を決し、兵隊さんの勞苦を謝して立ち去らうとすれば、これから先は日本人が一人も居ないとまた云はれた。言葉の通ぜぬ苦力を伴にして山を下るのは全く無法と云ふ外ない。

山を下り始めると遽に雨がはげしく降り出した。忽ち雲霧に包まれてその寸前をも見えなくなる。只不規則に積み上げられた石段をステッキを頼りに一段々下りて行く。名も知らぬ雜草が石段一ぱいに茂り、その石段を深すゝら困難を感じる様になつた。右へ左へと折れ乍ら後ろ向きになつたり、岩にとまつたり、雜草をのけつゝたゆまず下りて行く。大きな岩角に着いた時、風が遽かに變つて來た。忽ち雲霧は散じて眼前に奇巖怪石の奇態を見える。巖然として上視すれば劍戟の如く、偃然として偃臥するものは手の如く、襟を正して跌座するは老僧の入滅すが如く、眉を聳びやかして待侍するは、武人の怒れる

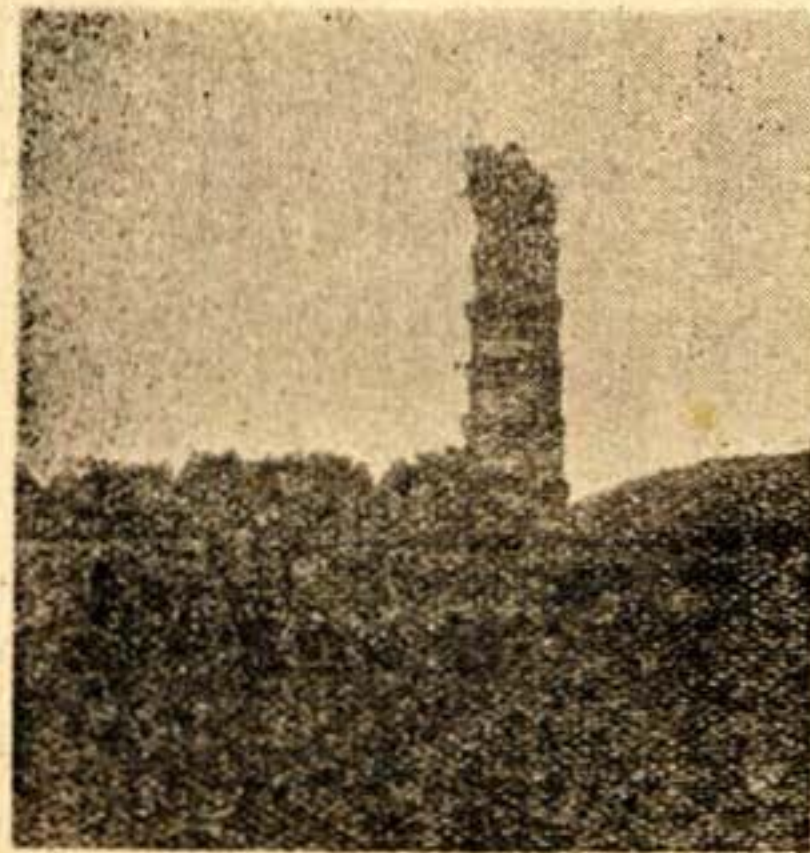
が如く、今迄の趣とは一變せる光景に接し
只、偶然とするばかりであつた。

時に遙か彼方より大きな響がきこへる。驚
き乍ら考へて見ると山の下の方で雷が鳴つ
てゐるのだ。僕と苦力は偶然にも顔と顔を
見合せる。互に言葉は通じないが、彼の顔色
も青い。

幾つかの岩を越つて下りて行く中にまた雲
が晴れて來た。濡れた外套を苦力に渡し、眼
下何千丈の岩角に腰掛けて伏臥すれば點々と
青き中に白きものを見ゆ。肉眼では見分けつ
かぬが人家であらう。すぐ下にまた西林寺の
塔も見へる。虎溪の流れも右から左へと流れ
てゐる。右の後方に眞黒な入道雲に似た岩山
が見えてゐる。これが名高い清少納言の隠居
を示した本物の香爐峰である。それを右に
見てまた下り始めた。この邊には支那煙草の
カラが處々に在り、支那人の草鞋も落ちてゐ
る。支那兵がつけてゐたらしいバンド外套ら
しいものも落ちてゐた。それを見るにつけて
もよい氣持はしない。一步々と足の置き處

をきめ乍ら下るのは容易でない。苦力が感心
に「茶水々々」と云ひ乍ら水筒のお茶を差出
す。一パイ飲みほした時に互に微笑を浮べ
た。苦力があとになつて仲々下りて來ない。
暫く待つてゐると手に一パイに山苺を持つて

廬山西林寺塔（禁遠建立）



來た。又この味も云ひ知れない味がした。名
も知れぬ花が美しく咲き亂れてゐる。秋の七
草も處々に見える。溪谷の流れが大きくなつ
た。時計は既に十一時を指してゐる。左手に
長い松林にさしかゝつた時分にこの松林の中

には敗残兵でも居ないかといやな氣持だ。視
界の遠らぬ所は餘計に氣持が悪い。今度は
苦力を先に立て、僕は後から行くことにし
た。又雨がしきりに降つてくる。まるで流す
様で濡れぬ所は一つもない。やつと人家のあ
る處に着いた。やはり塀ばかりで屋根は飛ば
されてゐるが、それでも田圃が植えつけられ
てゐる。遙か彼方に水牛を引張つて行く子供
が見える。この邊には珍らしい。杉松等の植
林がしてある。幾つか道を曲つて行つた處に
杉・松・榎等の苗が植えてある。支那には珍
らしい現象だ。左手に眞白く見へてゐた處に
到達した。大きな白壁で圍まれた家である。
すつかり戦火にかゝつて焼かれてはゐるが、
舊家らしい。その側を通つて行つた處に桐・
松・杉等の深い林がある。それが亂雑に切り
倒されてゐる。何の爲に切られたかわけはわ
からぬが枝は山ほど積まれてゐる。その切り
方が日本の兵隊によつたことは確かだ。ど
ん／＼と山を下り、廣い裾野に出た。こゝに
は多數の水牛が放牧してある。名も知れない



廬山白蓮社にて（左端筆者）

支那將兵の墓がいくつもある。それから百
米もさがつた處に虎溪の流れがすさまじい
勢で流れてゐる。

雨の爲に増水して橋が見つからない。苦力
が心配し、上に行つたり下に行つたりしてみ
たが見付からぬ。よく見ると橋のかはりに飛
石が置いてあるが増水の爲になつてゐるの
だ。早い流れを苦力に助けられて膝を没する
水の中を眞剣に渡つたのである。渡り切つた
時に苦力が又微笑を見せた。そこから美しい

水成岩の敷石がある。人家が虎溪河に沿つて
二、三百軒ある。それを横切つて行くと左側
に大きな楠が一本ある。何か堂宇の跡らし
い。大きな敷石がいくつも不行儀にならべら
れてゐる。二百米も行つた處に門が見へ
る。門の左側の白い壁に黒字で白蓮社と書し
てある。門の上には南無阿彌陀佛と書いてあ
る。東林寺であることを直感した。

門に入ると附近の子供が十人ほどいやな顔
をして迎へる。「來」を告げると寺僧が來り
迎へる。袈裟を出し念珠をしめすと日本僧で
あることを直感したかニコ／＼して迎へた。
しきりと歡迎の意を述べて本堂に行き小經一
巻を讀む。出来るだけ大きな聲で念佛をして
ゐると知らず知らずの間に涙があふれて來
た。

本尊は文殊の尊像である。晋にきく程立派
ではないが今までの寺とは異つて不思議に引
きつけられる。柱に簾が掛つてゐる。その文
に、「虎溪聚三人三人三笑蓮池開一葉一葉
一如來」とある。同入和合の意味であらう。

案内のまゝに應接間に行き、僧であること、
念佛の信者であること、日本では蓮門と云ひ
て蓮社號を相續してゐることを述べると住持
は事の外喜んで茶を出し、飯を食ふたかと云
ふ。日の丸辨當のあることを示すと、では熱
いお茶をと云ふ。お世辭は仲々よい。廬山慧
遠法師文鈔一冊を出して呉れた。筆談に紙片
を求めると、紙はないといふ。止むを得ずち
り紙を出してまた筆談を始めた。念佛を以て
支那事變の解決、東亞新秩序の建設をせねば
ならぬと示せば「ホーホー」と云ふて喜ぶ。
のきをくぐつて白蓮社に案内をせられた。十
間七間のお堂、中央に等身の阿彌陀三尊佛
が安置してある。堂の三方には三尺に四尺位
の石磐に慧遠法師を始め、慧永慧持等の歴代
の像がある。難民が堂の中に十組以上も居
る。百姓の道具が持ち込んである。慧遠法師
の像の前に大きな臼がすへてある。どかして
呉れと頼んだが二人や三人ではどうしても動
かぬ。歸らうとしてふと別室を見ると難民の
子供が腕をケガしてベットのの上にうなつてゐ

る。持ち合せてゐたメンソレータムを與へると親が手を合せて私に禮を云ふ。ついてくる子供にはキヤラメルを與へると喜々としてざわついてくる。

苦力がしきりと先を急ぐので時餘にして退下する。その時住持が紀念にと旗に一筆書して呉れた。曰く「得阿耨多羅三藐三菩提廬山東林寺釋慧覺書」と。

東林寺は大元十一年江州の刺史恆伊が施主となつて建てたのである。慧永・慧持などの聖僧等百二十三人がこの白蓮社の尊像の前で念佛三昧を修し往生淨土を願つたのである。

慧遠法師は「念佛三昧詩序」を作り謝靈運・王喬之らは念詩を賦し劉遺氏は白蓮社贊文を作りて淨業をはげんだのである。時に大元十五年七月廿八日であつた。寺前に百坪の池あり。今も盛りと白蓮が咲いてゐる。香氣紛々として千五百有餘年今尚續いてゐる。一會々人々妙理の汚濁を離るゝこと泥中の如くなるに因みでの念佛結集を白蓮社と稱したのである。淨土宗の蓮社號に基くはこれに因る

のである。

この「念佛三昧集」の中に、三昧に入るには色々あるも、その中「最も功高くして進み易きは念佛を以て光と爲す」と云はれてゐることゝ、法然上人の選擇集の筆頭に「念佛爲先」と書かれたのを合はせ考へて見る時、時代こそ違へ慧遠法師の高き徳業がしのぼれる。私共念佛宗法然主義の者はこの思想を根底として大陸に進出せねばならぬ。

門から小川に沿つて右へ四百米、そこが西林寺である。山の上から見てもた寺であつた。路は昔と違つて畔道だ。雨の爲に所々こはれてゐる。その中間の右手に百五十米程離れた處に小高い森がある。これが法師の墓である。西林寺は全く荒れ果てゝ寺僧も居らず本堂彌陀三尊はまつゝてあるが香爐だにもない。慧遠法師の徳をしのんで餘りのみぢめさに涙がこぼれた。墓への路には敷石もはづされてザンゴウが築いてある。飛び越えて小高い處、三間に四間の墓堂あり、中央に直徑五寸ほどの礫に依つてマンデウ形に六尺も高

くもられてゐる。側に深さ二丈といふ井戸があるが、砲彈にぶちこまれてみじめな姿である。墓所大分にあらされてゐる、心なきものゝ仕業であらう。墓に向つて小經一卷をあげ法師の徳をしのびつゝ退下した。

これから蓮華臺へは三里半あるといふ。どうしても足で運ばねばならぬ。苦力に助けられて出かける。途中道は水成岩の立派な敷石で敷きつめてある。佛教盛んな時の盛儀を思はずにはゐられぬ。軍隊用の電話がしかれてある。この電話一つで自分ほどの位心強かつたか知れぬ。部落に着いた時には兵隊が二人居た。一人は私の近くの者であると答へた。こんな處で近所の者に遇はうとは意外であつた。蓮華臺まで知らずに道は運ばれた。

(以下次號)

これを見るをりくことにおもひ
いて、南無阿彌陀佛を常にとなへよ

法然上人詠歌

三辰村田んさ父おの慢白





坂根翁のこと (三)

吉田 絃二郎

悟りの道

人間の一生の間には幾度か危難もあり、天祐もあり、その危難に遭遇した刹那、天祐にあづかつた刹那、心の世界に目を開く人があり、目を開かぬ人がある。人の死を眼のあたり見て悟る人もあり、悟らぬ人もある。尊い機縁といふものは自分自身の心がけの裡にありともいへるであらう。

坂根翁の廿四五歳のころの話である。翁は大阪から京へ淀川を舟で上つて来る途中、牧方あたりにかゝつたところ難風のために舟は轉覆して多くの船客は、折からの梅雨に水量を増した濁流の底深く溺れて行つてしまつた。翁はその

時舟の一番奥の方か何かで、最も危険な場所にをられたさうであるが、それでも舟底から這ひ上り、這ひ上りして三度目に辛うじて水の上に泳ぎ出して一命を助かつたといふことである。翁はこれこそかねて念ずる清水の觀世音のお助けだと信じ、燈籠を寄進せられ、一層信仰の念を深くして一生日々の參詣を怠らずつゞけられた。

かういふ危難に遭つた場合に、たいていの人はありがたいと思ひながらも、それを偶然のこととしてしまふ。それを尊い機縁として受け容れ、一層信心を深くして行くところに凡人と、非凡人の差があるのであらう。路傍に行き倒れのたゞ一人の乞丐を見て無常を觀じ、尊い悟りに入つた聖者もある。何萬の死骸を見ても悟らうとさへしない者も

ある。氣の毒な人である。

木魚の音

東南たね子といふお方が坂根翁の追想として書いてをられる中に、「鶏鳴曉をつくる頃身を一本の杖に委ねて、或時は介添の手をかりて朝な／＼悠然と歩を運ばされた翁は祇園御旅所或は錦天満宮などへ朝詣する人たちの目には必ずとまつたことであらう」といふ條がある。この悠然と歩を運ばされたといふ言葉はいかにも翁の風貌を如實に物語つてゐるやうに思ふ。

たいていの人が朝詣りをしながらも小急ぎに急いでゐるものである。これは翁が晩年の姿を記したものであらうが一切を佛さまに委ねた人の尊い姿が想像される。

また同じ文章の中に「比叡おろしははげしう吹きすさび霞たばしる中、或は篠つくばかりの大雨を冒して朝詣をさせられる事五十有餘年……七十有餘の高齡を以ていつも定の時間に御離床、しかも定まれる道を一杖ごとに七八足のゆるやかな歩調でゆかれる。而して歸られると直に佛前に向はれる木魚の響でお歸りになつたことが分る位である。」

世の中には朝の散策氣分でお詣りをする人もある。翁の朝詣はまことに眞剣なものであつたことがこの文章の中でもうかゞはれる。雨嵐の中、吹雪の中をも、ひたすら感恩謝恩の念に胸打たれつゝ一歩一歩足を運んでをられた姿が想像される。

「扱もこの翁の御信仰に至つては常人のとても及ぶ所ではない。先祖の追善といふ事については尤も嚴重に行はれて四隣に響く木魚の音で今日は何日ある某様の御命日といふ事が知れるのであります」とも誌されてゐるが、京の町の靜かな朝まだき四隣にひびく木魚の音に一向専念亡き人の追福を念じてをられた翁の貴い姿が眼に見えるやうである。

報捨

翁は朝詣での道すがら幾度となく旅僧通路たちにも逢はれた。そのたんびに心からの報捨をされた。

家にはいつも杖笠が準備してあつた。絶えず通路たちは翁の軒下に佇んで、杖、笠とともに幾何かの金をいたゞいて立ち去つた。

夏になれば軒先に麥湯を供へて道ゆく人々にさゝげ、蟲けら禽獸に對してもやさしい心やりを持つてをられた。

印度では井戸を堀つて旅人に清水を供へることを尊い供養の一つにしてあるといふことを聞いた。

舊約聖書には葡萄畑の片隅を残して旅人のために葡萄を供へよと書いてある。また秋の收穫の折には落穂はそのまゝに畑に捨てゝ置いて貧しい人のために供へよと書いてある。

人のためにやさしい心づかひをすることは東西同じく尊い人間の道としてあるが、翁のやうに生涯を通じて人のためにさゝげ物を供へた人は稀であらう。

怒りを知らぬ人

人を怒るといふことはまことに悪いことであると知りながら怒を抑えることはむづかしい。人は一生嗔恚の炎を燃やしがちである。

翁は一生涯人を怒るといふことをされなかつた。この一點だけでも凡人ではないといはなければならぬ。

翁の家政女學校で、烏丸の因幡藥師の一隅を借りて假校

舎を開いたをりのことである。庫裡の廣い書院を歩いてをられた翁は不圖「あゝこゝは宜い、こゝに佛さまを安置して生徒たちに拜ませることにすれば」と語られた。

傍らに立つてゐた主幹の某氏は「そんなことはできませんよ」と吐き出すやうに言つてしまつた。某氏の考では恐らく學校を建てるについては翁は非常な努力を盡した人であるから感謝もするが、苟しくも生徒の教育方針についてはわれ／＼教育者に任してもらはねば困るといふ肚があつたのであらう。

かういふ場合翁の立場にゐる人であつたら恐らく十人が十人、敢然として主幹の態度に對して、主張に對して一矢を酬ひるであらう。ところが翁はその時不快な顔色一つ見せなかつた。否、翁は衷心主幹の言葉を善意にのみ解釋してゐたのであらう。翁はたゞ「いや、追々さう致しますよ」と答へたのみであつた。

しかも翁のこの希望は後になつて何の無理もなく達せられた。

誠の通路

翁が一生の間その淨財を知恩院はじめ諸處の寺院公共の事業に喜捨されたことは數かぎりもないが、餘りに世間の爲や、寺の爲に盡されるので、家の商賣の方に支障を來たすこともあり、時としては番頭から苦情が出ることもあつた。そのやうな時翁は「わしの家はもと／＼神佛のおかげでこれほどに立ち直つたのであるから、もしそのために家運が傾くやうなことがあつてもそれは神佛にお返しするのだから、すこしも心残りはない」と答へられたさうである。かういふ風で翁にはその富は文字通りの淨財であつて、富のためにかへつて自分を苦しめる世の富豪などとは雲泥の差があつた。

翁は明治四十二年の秋ごろその多年の念願であつた四國八十八ヶ所の靈場巡りに出かけて行かれた。ところが翁の出立後十日目に翁所有の家や倉庫が火災のために焼けてしまつた。京都の留守宅からは翁に宛てゝ至急歸るやうにと電報が發せられた。三日目に翁からは返事が來た。

「火事とか人の死とかいふものは世にありがちのことですあわてる必要はありません。人の世にはかういふ不慮のこととがあればこそわたしは巡拜に出たのです。わたしは佛さ

まに誓つて修行をつゞけてゐるのですから、修行を了へるまでは歸ることはできません。お氣の毒ですが皆で後始末をやつて下さい。」といふ意味のことが書いてあつた。家の人たちはあれこれと焦燥り、慌てふためいてゐるのに、翁は靜かに巡禮をつゞけて行つた。一切を棄て、誠の信仰に生きてゐる人の尊い姿がうかゞはれる。

トルストイの作にこれに似た話がある。

金持ちの男と貧しい男が伴れ立つて聖地巡禮に出かけて行く。金持ちの男はその使用人たちに對して自分の留守中には畑は何うしろ、家畜はあゝしろ收穫は斯うしろ、火の要心をしろといふやうに微細のことまで一々指圖をして家を出た。貧しい男は信仰の厚い男で、家を出る時に家人に對してたゞ「神様を信じ、神様の御心のまゝに」といふやうな意味の言葉を殘して行つた。金持ちの男は道中でも金を盗まれることばかり心配してゐたので聖地エルサレムにたどりついてても何のありがたい感銘も受けず長い旅をつゞけて歸つて來た。家に歸つて見ると家の中は散々であつた。家畜は死に、田畑は荒れてしまつてゐた。貧しい男は途中で、たま／＼病氣に悩んでゐる一家の人

人を救ふために旅費をすつかり使ひ果してしまつた。そしてエルサレムへも行かず歸つて來てしまつた。しかし家に歸つて見ると家畜は殖え、田畑は豊かな收穫に恵まれてゐた。

それからトルストイはさらにその話の中にかういふことを書き添えてゐる。

金持ちの男はエルサレムの本堂で多勢の人々に押しつぶされるやうな苦しい思ひをして聖像を拜んだ。かれはその時不圖、貧しい男が樂々と聖壇の上に坐つて聖徒たちと並んでゐるのを見た。しかもその男の頭からは後光がさしてゐたのを見た。

金持ちの男は村に歸つて來た時、貧しい男にその話をしたら、貧しい男は「旦那さまそれは何かのまちがひでございませう。わたくしはあなた様と途中で別れたきり、あのまゝ村にもどつて來たのでございますから、わたくしがエルサレムの御本堂に坐つてゐた筈がありません」と答へた。意味深い話であると思ふ。

× この前の號に坂根翁が晩年になつて俤に乘られたことを

書きましたが、あれは鹿ヶ谷や叡山など遠いところに參詣をされた歸り路であつたさうですから改めて置きます。それから關通上人の話を書きましたが、箱根の關所で裸一貫の雲助たちが易々の關所を通つて行くのを見られてから雲介といふ名を自分で名乗つてをられたさうです。これも書き添えて置きます。

淨き友の會だより

「淨き友の會」九月例會は七月二日の御施餼鬼以來久方振りの初集であつたが、折柄の驟雨に觸ひされて十數名の會合に過ぎなかつた。講話は既に極樂の莊嚴を説已つて増持名號の段であつた。再三の停電の中で念佛の聲は高く澄むだ。座談に入つては、先月の北海道巡講の事、會員の夏期中の體驗、郷里の風物等の話やら奥澤九品佛の二十五菩薩の行道に會員が參加して橋本、原田升水等の諸菩薩が現出した等、話ははづむのであつた。

信仰座談會十月案内

日 十月八日(第二日曜) 午後七時
同 廿二日(第三日曜)

場 所 東京市本郷區東片町七八(白山上)

美容大學院 橋本樂榮方

講 師 中村 辦 康先生
講 題 阿彌陀經講義

非凡な平凡

池田 立基

浄土宗といふ宗旨は、近頃では布教が大層骨の折れる宗教になりました。と云ふ譯は、元來お念佛を申す人は、自分が下根下機であつて、智能により悟を開くことが出来ない、自分獨力では、此世に安心して生活の出来ない者だと承知するのが、第一條件であります。然るに昨今の人には學問教育の發達につれて、人間自身の力を相當偉大なものと考え、各自もまた、相當の能力ありと自負する結果、他人の言ふことを聞き流したり、また自己の所見をより以上に評價したり、或はまた科學の通有性として總てが懷疑的になつて來ますので、浄土宗の生命である、彌陀如來と極樂浄土に對する信仰が困難になつて來ました。

宗教學校で宗教を育を受けて居る人、換言すれば將來宗教人となり、教線に立ち信仰を鼓吹せんとする青年僧侶、特に浄土宗侶にこの信信仰がない……と云ふと稍語弊があるかも知れませんが、少くとも、他をして信ぜしむるに足る力を發揮するだけの信仰力を持つて居ない様な氣持がしてなりません。これは恐らく學校教育に缺陷があるのに相違ないと思ひます。學校の講師は皆學者で、學問を講じるだけで、信仰の涵養と云ふ點はまるで我無關焉であります。他をして信ぜしむるに足る力ある宗侶の乏しいのも無理はありません。

征旅の回想

安田秀賢

序

昭和十二年十月二十四日より昭和十四年七月六日の召集解除までの間、上海から南京間の大小都市、小部落。南京から岳州までの揚子江岸、殊に道教の盛んな岳陽地區一帶、砲火、討伐、宣撫、兵隊の一人として宗教家としての自分の臉に刻印づけられた兵馬聖戰下のいろいろの動きを、一つ一つ回想したいと思ひます。唯々、惜むべきは出征當時からその日その日のことを筆にとゞめし日記帳を○の命令に依り各兵隊ともに○○せし爲、地名をハッキリ致しません。もとより風のやうに走り去る砲火の際、あの目、あの頬、川の色、天の雲、軍靴に踏みにじられる一輪の花、人の心、などをすこしづゝ書いてゆきたいと思ひます。文體の整はぬのは一重にお許し下さい。

一、召集令きたる

ん。

誰でも向上進歩の途上にある青年は一日でも早く上達し一人でも多くの同輩を凌ぎ、自己の優秀に憧れを持つのでありますから、自然に偉がる、偉く見られたい傾向は青年階級の通有性であります。進歩の道程にある間は止むを得ない現象でありませう。

しかしそれを止むを得ないと云つて放任しては置きたくないと思ひます。學問の教育に關へて信仰心の培養を相當強度に行ふ必要があります。相當以上の力をこれに注ぎまして、一方の修學方面から大部分は抹消されてしまつた極端な部分が頭の底に殘滓の様に殘るものと見て宜しいでせう。此殘滓の様な微力の信仰心も時日を重ね、繰返しが積まれますと、終には動かすことの出来ない力強いものとなるのであります。入無生忍と云ふことを了つた様な了らない様な氣持で聽聞して來た時よりも、名工作の彌陀尊像を靈域の殿堂内で參拜し、觀經曼陀羅を熟觀して、靜に木魚を叩きながら數百遍の念佛で得た信仰心の方が何れだけ其人に力強い生活の支持を與へるか分らないと思ひます。

若い人は早く偉くなり、早く自己の偉さの偉りを覺つて、一日も早く平凡の自己を見出し、平凡人として不惜身命の活動に入つて貰ひたいと思ひます。

怖らく世の中で一番危険で、一番害毒を流すものは、此偉がることであります。此偉かりを捨てた偉い平凡な人こそ、人間社會が要求する大切な人格であります。此點に於て私は淨土宗の元祖法然上人を非凡なる凡僧と申上げたいのであります。一代の聖經を繙くことと五回、學才南都北嶺を歴し、大原に於ける問答の如き、獨軍が波蘭を席捲する以上の凄さであつた。あの明敏俊才博學強記一世に冠たる上人にして、これは已れ凡僧なりと一文不知の愚鈍の身になして、あま入道の無知の輩と同様に淨土易行の門内に閉ぢ籠もられた上人は、天下の學僧を相手にする狭い天地から脱せられて大衆と共に眞に廣大な世界を開

「ドンツ、ドンツ、ドンツ」

「安田サンツ、安田サン」

ハツト目をさましつゝ「きたな」と思つた。

表戸をくると、一人の役場の吏員が

「御苦勞さんです」

とうわづつたやうな聲で、カバンから赤い

召集令を出した。私は躍る心とある種のモヤ

モヤした感情を覆ふやうに

「覺悟はしてゐます」

赤い紙に印を押して渡すと、吏員は轉げる

やうに次の家へ、

「オツサン、召集がトウトウ來たんのか」

本堂の道を隔てた家のオバサンが寝まき姿の

まゝ、いつ起きたのか私の養母六十二歳と二

人、ホロホロと白い涙を見せてゐる。六歳に

なる幼女は

「お父サンに、赤いタスキがきた」

と大聲に蒲團の上ではねかへる。

「泣くな、泣くな、決して涙をみせて呉れる

な」……

未明の午前四時、トントんと本堂へ登り四

圖の雨戸をカラカラと明けて、私は未だ暗い

庭園を見た。

かれた方であります。

お念佛は誠に十萬億土を剎那に越えて淨土に往生の出来る勝れた法である、また三歳の兒童も容易に行ひ得る易しい法であります。しかし彌陀如來の大本願を信じ淨土往生を目的として三心具足のお念佛が申せる人が果して幾人ありませう。實にこれ難信の法であります。自信教人信は淨土宗侶の座右銘で、これを擱いては淨土宗侶の活動は無力である、無意義となりませう。三千の學僧の輩出は難しとせずとも、一名の徳僧は現在に於て旱天に雲を望むが如きであります。しかし徳僧となり得ずとも凡僧となつて念佛を體得することの出来る人は幸福です。

教界に對して望む所のことは、また俗社會に於ても同様であります。近頃國家非常時に際して男子は悉く遠征萬里或は炎天下に或は朔風に鞭たれつゝ死線を越えて働いて居られます。銃後にあつては男子も婦人も同心協力能く聖戰の目的に副うて活躍をして居られます。

しかし此間に於ても、各個人の偉がり、即自分と云ふものを人に知られたいと云ふ氣持が、非常に大きな障礙を、各方面に露して居ります。同一目的で働く二つの會が、お互の勢力争の爲に、聖なる事業に醜い姿を見せて居ります。役員たらんと欲し、他を退けて克ち得た位置も、其業務の繁雜に堪えず、忽にして辭職を申出るが如きは、其聖職に身を捧ぐる精神なく、徒に自己の偉がりから起つた氣紛れの結果であります。他人に骨を折らして、甘い汁を自分だけで吸ふと云ふ、此卑劣な精神を徹底的に除かなくては、淨らかな世界は出来ないであります。人間は單獨で生活が出来ず、共に存じ共に榮える爲には各自が各自の力を捧げること、即犠牲的精神を要するのであります。大勢の力で一つの仕事を仕上げ、大勢の者が其御利益を享受すると云ふ、これが人間社會の理想でなくては

シットリと夜來の露をおびた樹木に見入りつゝ、心の中で、自分の不在の間、そして萬一の戦死の場合、妻は子女の教育と、もう一つ私の信念として

「寺院では妻と同居スベカラズ」

いくつもの寺で、住職が若くして逝いた後、その妻、その子、の成行のうらぶれを見てゐる自分は、自分は死んでも家族は獨立出来るごとく、別に京都に一家を構へて別居生活をしてゐたから。

家族はマアよいが、しかし、しかし、何が何だか、理智の光では割り切れぬ感情の潮がヒシヒシ迫つて胸があつた。そしてとめるべくない涙がボウダと流れる。

「これが恩愛の涙とでもいふものだらうか」しばらくして向ふの方から大地を蹴つて走る足音

「ウチのオッサンに召集や」

どうやら四、五人以上の足の音。

スツカリ涙を拭いて、本尊さまへお光を照らした。

時に十月二十四日。我が管下部隊、蘇州河敵前渡河前、猛攻戦の最中であつた。(續)

なりません。何の様な事でも自分一人の力で出来たと考へてはなりません、他人のお蔭である、他人のお力である。此考へは他人に對して常に感謝の氣持を有する様になるのであります。此感謝生活は人世を平和に導く基であり、人生を淨化する動機となるのであります。歌舞伎の舞臺で一代の名優六代目菊五郎が道成寺を踊つて居ります、間口十四間の廣い舞臺で白拍子に扮した菊五郎の獨舞臺であります。數千の觀衆は菊五郎一人の爲に陶酔の境にあります。しかしこれはいくら名人であつても菊五郎一人の作物ではありません。舞臺裏に働く數十名の道具方、衣裳方、床山、後見門弟、お囃子方、さては舞臺の上に並んで居る十枚十丁の長唄から、きいたか坊主の連中まで、概算して百人以上の合作の結果が、菊五郎の體を通じて觀衆を魅するののであります。人間社會には、何事も唯一人で出来上つて居るものはありません、自分獨り偉がつては大變な間違ひであります。蔭に隠れた人は、自分達の力で立派な仕事が出来たのを

喜べばそれで望が足りた筈であります。それが犠牲的精神であります。

これは佛教では大乘菩薩の精神と申しますから云ふ犠牲的精神、自己を犠牲にして他人を救ふと云ふのが、菩薩行と申します。國の爲第一線で護國の花と散る勇士も、工場で油に汚れ眞黒になつて働く職工も、身に數兒を抱え骨の折れる家業に従事し、しかも勇士の歡送歡迎、英靈の奉迎、慰靈祭追悼會、又は遺族慰問等に日夜獻身的に活動する婦人、皆大乘菩薩の聖行を實施して居る人であります。唯これ等の人に倦怠心を起さしめず、自己の聖行に就て懷疑を生ぜしめない爲には、各自の偉かりを除き、非凡な凡僧法然上人の念佛一行にお入りになつた御心持を伺ひ奉ることが最善の方法と信じます。

う。しかし日本に於て婦人連の腦裡に刻んで貰ひたい犠牲の守り本尊は、孝明天皇皇妹和宮様後に御難産遊ばされ靜寛院宮様と申上る方であります。

一天萬乗の尊き御血筋の御身を以て國の爲民の爲、家門の爲、姑の爲、夫の爲、御自身を犠牲として日本婦人の典型をお示し下された嵩高なお方であります。絶對に表面にお立ちにならず、正史にも記載されず、維新日本の大正劇に重要な役務を遂行遊ばされたのであります。

「惜まじな國と民との爲ならば

身は武藏野の露と消えても」

と京師を後に御出發の際の御詠は涙なしには伺へないのであります。嵩高な美德は實に大乘精神以外の何物でもありません。

平凡に隠れる犠牲的精神の御姿、日本婦道の典型は増上寺大殿に元祖法然上人の御影と共に靜寛院宮様の御尊像を拜するとき口に稱名心に奉國奉仕の決心が湧くものと思ひます。(筆者は講安寺住職、フランス語の大家)

俳壇

大田 耳動子



背の子も雨乞の數に入りけり

山口 長岡 見智

評「土」と云ふ映畫に出てくる雨乞の場面より見たことのない私には、それが、どんなに眞細なものであるかを知るとしもないが、此の句から村人の老人も子供の果までも一體になつてゐて、如何に悲壯なものであるかと云ふことを窺ひ知ることが出来た。

米子 白 土

こち向ける金魚の口の泣くとき

評此の句の價值は、すべて下五字にかゝつてゐる。泣く如きと見てとつたのは素晴らしい發見である。俳句には（外の詩でもそうであるが）此の發見がなければいけない。自分が人と違つて斯く見たと云ふところがなければいけない。

さて、表現の問題に移ることにして「泣く」と「き」の「き」であるが、之を何故に「く」にしなかつたか。恐らく「く」にすれば「泣く」と「き」とが二つになるので作者が之を耳障りになると懸つたものかも知れない。私は其れ程、氣にならないと思ふが、宛に角、相當苦心の跡が窺はれる。

萩の茶屋朝の廣さを憩ひけり

評「いづれは萩の名所にある茶店のことであらうが、朝のことでもあり、まだ萩を見る人々が、おしかけて來ない。おそらく作者一人位のものかも知れない。目障りになる人もたらず、晴れた朝の清々しさに、心ゆくまで浸ることが出来たものであらう。「朝の廣さ」が利いてゐる。

小樽 中村 茂樹

草の花の道をもちけり地藏堂

石川 西村 けん治郎

蛇うつてたのもしき牛の乳しぼる

新宮市 奥村 映水

蚊遣火に足を揃へて小貓かな

前橋市 瀧澤 全翁

螢火のみちてゐる野の歩哨かな

中支浪遺 時岡 秀雄

隠元の垣根をうて秋の色

大阪府 日根野谷配三弘

小さき大小さき子産みぬ金木犀

群馬縣 設楽 香風

蟋蟀を妻とききけり居待月

富山縣高岡市 内山 澄水

馬追獵を秋の心にきゝ入れる

小樽市 平井 善慈

馬の尾のはげしさに蛇せはしなき

大森 原田 ふで

蚊柱や踏板ゆるく雞舎の口

横濱市 小宮 勝平

豊年の芋の畑に立ちいづる

京都市 鈴木 白舟

刈られたる草のかはけるギリギリス

同 水田 七郎

登り切つて蟬の涼しき鮮かな

大分縣 石堂 世山生

こほろぎを散らして蚊き子猫かな

京都市 福島孝治郎

干竿のけしきとゝのふ蟬鈴かな

會津縣軍病院 宮下 光雄

枕邊の菊一輪に秋早し

小樽市都通町 水室 凡子

蛇の音とかゝはりもなく秋の聲

堀木 大輪 清

稻の波をりかさなりて虫の徑

亡父の初盆に 日向法親

迎へ火の鮮かなるが唯うれし

北海道 六 迷 龜山

蟬止んで虫の音涼しき夜となりぬ

同 高谷 名峰

蟬じつと鳴き澄む木々の深さかな

千葉縣 安田 九郎

しみぐと抱く子重し盆休

香川縣 是 ち

白砂の鹽子を盛りて盆祭る

東京 清水 貞水

朽葉おし上げて茸や香らする

京都市 水田 七郎

青柿の落ちて厄日の迫りけり

東京 小山 靜念

山莊の馬仕立てあり萩のつゆ

長野縣 宮澤 榮子

涼風にゆるゝ燈籠香を焚き

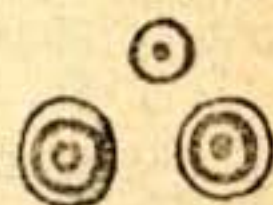
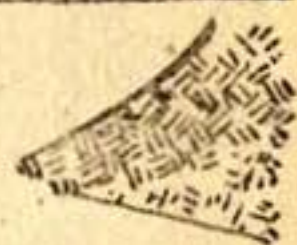
長野縣 宮澤 由子

庵に來て涼しき風のおのづから

投稿規定

官製はがきに一回二句以内とし「淨土」編輯部併壇係あて送ること

武 士 日 雇



小島健三

中島松二

親切な娘

「誰ぢや、お咲どのか？」

源八は、一日の日雇から、汗みどろになつて歸つてくると、軒の傾いた背戸の方で、水仕事をしてゐる女の後姿が見える。

「はい、源八さん、お歸りなさいませ。

あんまりこの邊が取散らしてございますので、ちよつと掃除をしてをります」

「いつもながら 忝けない。しかし、もう日暮ぢや、家でも心配してをりませう。早く歸らぬとまた叱られますぞ」

「はい、それは存じてをります。行水のお湯も沸してございます。お浴しなされましては……」

「いや、御親切は、身にしてみてをります」

「世が世なら、子松家は弓術師範で、ご不自由のない御身分、それを悪人の讒言によつてこのおいたはしい今日このごろ

お氣の毒でなりませぬ』

『はゝはゝ……何をお云ひなさる。皆、これも時世ぢや』

近所の娘お咲の眼は、涙にうるんでゐた。

源八は、松江の臣であつた。姓は子松、時達と名のつて、弓術は父祖の血筋をうけて天才といつていい。その才分と、豪氣、剛直を嫉まれて、村流しになり、國內の大原郡に蟄居して、今では、その日の糧にも困つて、日雇になつてゐる。あくる朝、源八は、味噌汁の實のないのに氣がついて、戸外に出た。

全兵衛は庄屋の下男で、茄子畑に水をやつてゐた。

『全兵衛殿、誠にぶしつけぢやが、その茄子を少々賣つて下さらぬか？』

『これは源八さま、何かと思ひましたら、茄子でござえますか。賣つてくれなんて、お前様一人なら、なんぼ食へるモンではねえ。ほしかつたら、いつでも取つて行かつしやれ』親切な全兵衛は、十五六の茄子をむしつて源八の前に置いた。

『忝けない』

『なんの、茄子くれえ、源八さん、家の旦那は、源八さんは偉いお方だ。大事にして上げないと罰があたると云つてます』

『何んの、偉い奴が、お役御免になつて、日雇なんぞする筈はござらん。それでは、この茄子を……』

『さア、いくらでもお持ちなせえ』

源八は、茄子を持つて家に歸つた。

頑固な夜伽

その翌朝。

全兵衛が、朝早くその畑にやつて來ると、きのふ源八さんに取つてやつた茄子のところに、こよりで錢を結びつけてある。

『あれツ！』

と、全兵衛、驚いてしまつた。ぶらん／＼茄子の枝に、錢が下つてゐる。

『あゝ、義理がたい源八さんに違えねえ』

その錢を搔あつめて、源八のところに飛んで來た。

『源八さん、飛んでもねえ事をしねえでくれ』

『何んぢやな？』

『この錢だが、お前さんのほかにはねえ。そんな事をされたんでは、旦那さまに叱られるだ』

『いや、私は一向に知らぬ事だ。それは大方天道さまが、無』

「慇懃な庄屋さまと本兵衛さまにおさづけになつたものでござらう」

その夜、お咲が、こつそり裏口から這入つて来て、

「源八さん、お出で……」

「何んぢや、夜、若い娘が、男ひとりの家に参つて？」

「あの、庄屋さんの家で、今、男の子が生まれまして、みんなお祝ひに行つてをります。源八さんもお顔を出したら、どうでございませう」

「おう、庄屋さんで男子がおうまれになつたか、それはお芽出で度い。それでは、お祝に参らう」

「さう、なさいませ」

「時に、お咲どの、お祝ひに何を持参いたしたものだらう？」

「その事で、私が参つたのでございしますが、何んにもお持ちにならず産婦の夜伽にまゐりましたと仰しやると、どんなに庄屋さまがお喜びになるか知れません」

「それは忝けない」

お咲の親切が、源八に有難かつた。

その夜、源八は、庄屋の家を訪ねた。

「この度は、男子御出産との事お芽出たりござつた。つねくご懇意にあづかる拙者、今宵は夜伽にまかり越しました」

すると庄屋は喜んで、

「それはく有難うございます。實は此間ぢうからの介抱で、家の者がみんな疲れてをります。源八さまにお願ひすれば、こんな確なこ

はございません。それではお言葉に甘へまして、今夜は、みなの方をゆつくりと寝させてやりませう」

引うけて一同を寝かした源八は、一人産婦のまへに、きちんと坐つて、身じろぎもしない。

ちつと、産婦の顔を見守つて、まばたきもしない。お茶を運んでも、夜食を持つて来ても振向かない。

これには、産婦の方で驚いた。

翌朝、代りの者が来て源八が歸ると、産婦は、さつそく、主人を呼ばせて、

「ゆふべは、源八さんに見詰められて、顔の置場に困りました、もうあの人の夜伽は、ごめんでござります」

と、悲鳴をあげられたほど、武骨一邊の古武士のやうな武士氣質の源八であつた。

しかし、この源八に春がめぐつて来た。

松江の城から家老の三谷半太夫が、わざくやつて来て、勘氣御免の報があつた。

喜んだのは、庄屋をはじめ、村人一同、お祭のやうな騒になつて、庄屋の家で、歸参祝ひがあつた。

「源八さま、御芽出度う——」

「こんな芽出たい事はない」

武骨だが、信望のある源八は、誰にも尊敬されてゐた。



「お咲坊はどうした、源八さんを一瞥面倒を見
たお咲坊だ。こんな時なせ、お酌に出さん」

「庄屋は、お咲を呼びに聚所へ出かけたが、そ
こには見えなかつた。『お咲坊は……』」

「はい、今、そこらに居りましたのに……」

「庄屋は、下駄を突ッかけて裏口から出て行つ
た。しかし、そこらにお咲の姿は見えなかつた。」

「こんどは物置の方に廻つて見た。」

「淡い月が出て、秋の虫が、しめやかに鳴いて
ゐた。」

「お咲は物置の柱に寄りかゝつて、泣いてゐた。」

「お咲——」

「は、はい」

「あすは、源八さんが歸るッていふのに、どう
してるんだ」

「……」

「お前、源八さんの御出世が、嬉しゅうないの
かッ」

「嬉しゅうございます。嬉しゅうございますが」

「……何んだか、自分でも判らない涙が……」

「そのさきは、涙に聲も聞きとれなかつた。」

迎へ 駕

村はづれまで村の人々に送られて源八は松江へ歸つて行つた。
恰度、凱旋將軍のやうであつた。

それから十日ばかりたつて、一挺の空駕と三人の立派な武士が、お咲の家の前にあたつた。訪づれた武士は、源八であつた。

『おう——源八さん……』

あまりに變つたその立派な姿に、お咲は、もう言葉も出ない。

『これはお咲どの、長い間いろ／＼と御芳志をいたゞき、お禮に參上いたしました』

『まア、何を仰しやいます。そんな固苦しい御挨拶はやめにして、どうぞ、おはいり下さいませ』

『お父上は』『はい』

お父上なんて云はれる身分ではない。そこへ、驚いてお咲の父が飛び出して来る。見ると、見た事もない立派なお侍が二人に、見違へるやうな源八がある。『やれまア、これは珍らしい』

お咲の父も母も、贈をつぶして、あはてゝしまった。

座敷へ通されて一通り挨拶がすむと、

『時に御兩親へ、はなはだ押付がましい事ながら、折入つてお願ひの筋がありました、弟と、從弟をつれまして參上いたしました』

『はい／＼どの様なことでござりませう？』

『餘の儀ではござらんが、お咲どのを、手前の妻に下さるまいか？』
『えーつ、お咲を……』

『と申しても、お咲どのとこれまで、やましい事はいたしませぬ。たゞ、浪々の長い間御親切にして下された御懇情、心魂に徹し申した。』

まだ、御縁談のお約束がありませなんだら、ぜひとも、手前申受けたく、實は、駕をもつて、迎へにまゐりました』

お咲の驚き——それにもまして父母の驚き、たゞ、夢のやうだ。

『お咲は、こんな田舎で育ちました者、お武家の女房になつて、御城下へ參りましても、勤まるものでは御座いけません。それに、この不細致では、お前さまの恥になります』

『私は、醜や纏致を貰ひに來たものではござらん。お娘御の心を貰ひに參つた』源八の言葉に、お咲の父母は動かされた。お咲は、恥しいやら嬉しいやらで、その場にもゐたゝまれなかつた。

偕老同穴

源八は、夫婦仲もむつまじく、後繼の息子も出來、八十歳の高齡になつて、佛教信仰の世界に生きた。

神技と稱された源八の弓術も、年には敵はなかつた。百發百中、當らざる事なしと云はれた源八の弓も、踏しめる足許が覺束なくなると小手のふるへに矢先が狂つて、『あゝ、また射損じたかッ』

その日、靜に家に歸ると、急に湯を命じて、すつかり身を清めて、

佛間にはいつた。

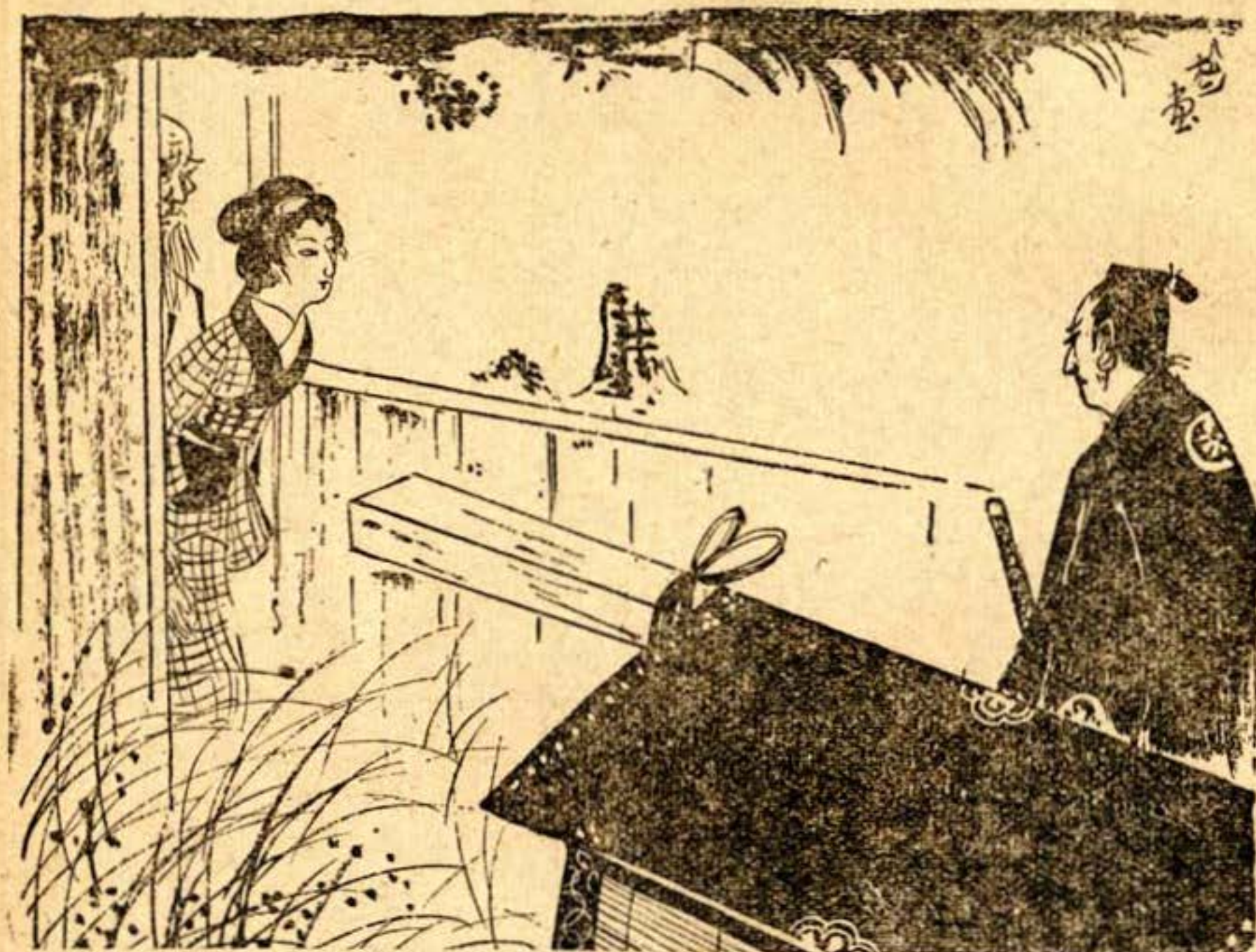
『唉、お唉はをらぬか』

『はい、何ぞ御用でござりますか？』
出て来たお唉の頭髪も、すつかり
白くなつてゐる。

『伴は、まだ御殿から歸らぬやうぢやが……お唉、そちと夫婦になつてからもう、早いものぢや、六十年にもなる。わしも取る年で、眼はかすみ、腕は萎えて、御扶持をいたゞいた弓矢が、もう物の役には立たぬ。もう天命は近づいた。わしは、お扶持をいたゞく譯にはゆかぬ。今後、わしの心に逆ふまいぞ』

その日から源八は斷食をした。家の者がいくら進めても、決して箸を手にしなかつた。門人や親類の者が駆けつけても、云ひきつた源八の心を、どう動かす術もなかつた。

『御家老三谷半太夫さまのお越しでござります』



『なに、御家老様とな……』
老衰に加へて斷食、もう源八は、臥床についてゐた。

『そのまゝ、そのまゝ。いかゞぢやな？』さすがは、家老、氣輕く

『この頃、お食事がすゝまぬとの事手前、粥をつくつて持参いたした。箸をおつけ下さらば仕合せぢや』

名家老とりたはれた半太夫、自分から給仕をしてすゝめた。

『御懇情、忝けのうござる』

さう云つて、半身を臥床に起して、たつた一箸、口に入れて、

『新米の粥でござりますな。源八、身にしみておいしく頂きました』

さう云つて箸を置いた。そして、そのまゝ食を斷つて、淨土からの迎へが参つた。さう云つて一門一族と

立派に別れを告げ、この世を去つた。

お唉は、その翌年源八の命日に、眠るが如く夫の後を追つた。(をはり)



小

笠

原

島

岩 野 喜 久 代

私はこの夏休みを利用して小笠原群島の父島と母島へ行つて参りました。小笠原島は東京府下になつてゐますが、東京よりはるか南の海上にありますので、大きな船で行つても三晝夜かゝります。丁度敦賀から日本海を渡つて沿海州の浦鹽へ行くよりも少し距離は遠いのです。

船が東京灣を出て暫く立ちますと、有名な黒潮の流れにさしかかります。黒潮と云ふのは、北海道の東南海岸から本州、四國、九州の太平洋に面する岸を洗つて、遠く琉球、臺灣の方まで流れる、日本海流のこと

を云ふのです。八丈島近海ではこの海流のことを黒瀬川と申して居ります。この流れは黒ずんで見えますのでさう云ふ名があるのでせう。同船の人々が「ほら、黒瀬に差かかつたから船がずんと揺れる」と申しました通り、この潮流を乗り切ります時船はかなりひどく動揺いたします。

八丈島は伊豆七島中一番大きな島で、また一番南にあつて、年中風波の荒いところ です。昔は罪人の中で死刑以外の一番重い者をこの八丈島に流したのですが、一旦この島へ流されたものは一生内地へ歸る望み

が無いので、罪人達も流石に妻子のことを思つて、血涙を絞つたものださうです。この八丈島には今も流人帖が保存されて、浮田秀家以下昔の數々の人の哀れなまた悲しい名を止めて居ります。

八丈島から猶、南へ南へと航海して行きますと、東京小笠原の丁度中間位に近頃爆發して話題を提供してゐる鳥島と云ふ小さな島が見えます。伊豆七島や小笠原のずつと西南方の琉黄列島と同じく富士火山系に屬する火山島で、人もほんの二三十人より外住んでゐません。小さな漁船は時々八丈

島と往復してゐますが、大きな船はほんの年に一二回、それも風波の荒い時には立寄らないと云ふのですから、島民の不自由な寂しい生活は思ひやられませう。或時立寄りました船客が島民の如何にも乏しい氣の毒な生活を見兼ねて、慰めにも持参の酒五升ばかりを與へましたと、彼等は非常に喜んで、御禮にと小島の干物を箱一杯贈つたさうです。その干物は島に何萬と飛んで来る小島の毛をむしり、臟腑を取り去つて、乾魚のやうに燻干しにしたものださうですが、固く臭くて如何にも口に出来るものではなかつたと申します。食料が無ければないで、彼等は止むを得ずさう云ふ工夫をもして凌いで行くのでありませう。

鳥島を過ぎますと、もう太平洋上一つの島影を望むことも出来ません。見渡す限り渺茫たる大海原、西も東もたゞ大きな波のうねりだけです。かうして海の上を一晝夜近く走りつゞけて、大海の真中に突兀と聳

え立つ父島群島を見ますとき、旅の身は安堵の氣持と共に世にも珍らしい龍宮城へ来たやうな感じがいたします。父島は火山島でも珊瑚礁島でもありません、太平洋の真中にてのひらほどの小さな岩山が少しづゝかたまりあつて、浮び上つたやうな島です。

小笠原まで参りますと、植物の形態が内地のそれと全然異なります。八丈島はほとんど内地と變りありませんが、一步小笠原群島に上つて見ますと、海岸から山まで、私共の目に珍らしくうつる草木花卉で滿されて居ります。先づ海岸に防風林の役目をしめてゐる大木に濱桐とタマナがあります。いづれも數十尺の亭々たる高さに達し幹も幾丈へに及ぶ大きなものが少くありません。併しこれらの木は建築用材にはならないやうです。生長が早いだけに木の質が粗であるからです。

それから眼についた樹木を挙げますなら

ばタコノキ、榕樹、バナナ、ババイヤ、棕櫚、椰子等で小笠原の棕櫚は太さも高さも内地の電信電柱位あり、その葉は方三尺位の大きなものでバナナを包裝して送るのに用ゐたり、屋根を葺くのに使つたりいたします。椰子は小笠原にはさう澤山ありません。バナナ、ババイヤは父島よりも母島の方に優良なるものを産します。殊にババイヤは年中あとから、あとから實つて、絶える時がないさうです。

私は母島にも参りましたが、ここでは美しい熱帯の花を澤山見ました。佛桑華、風鈴草、夜香木、羽衣草、ふなかつら、新戸邊かつら、それから觀賞用植物として内地に移入されるヘゴ、アレイカ、フェリツクス、谷わたり、濱おもと、ゴムの木等も澤山にあります。鹽、營林署では、白檀、紫檀、タガヤサン、桑、メリケン松等の苗木を試植して山へ植林する計畫もたてて居ります。

小笠原はずつと南の亜熱帯に屬する地です。すからさぞ暑いだらうと思はれますが、海洋の影響を受けて年中殆ど温度は平均し、夏最も暑い時でも二十九度を越えることはありません。日光の直射する下に立てば熱いと思ひますが、一度緑蔭に入りますと、涼風が海より渡つて、實に凄じよいのです、私は人々に小笠原に避暑に來たやうなものだと度々申した位です。

人口は全島で六千人位でその大部分は父島母島に住み、残りが兄島や姉島などに小笠原にばかりです。父島は小笠原島唯一の良港二見港を持ち、海陸空の要地になつて居り、その軍事的價值も非常時局の進展につれて益々重要視されて居ります。

父島の太村は政治、軍事、教育、通信の中心となつて居ります。大村、奥村、扇村の三村が二見灣内に沿ふてゐる部落ですが、奥村には歸化人と云つて、小笠原島に早くより移住した西洋人達の部落がありま

す。この歸化人のことを土地の人達は先住民族と申してゐます。伊太利人、米人、スペイン人等の子孫でいづれもハワイから移住して來たもので、カヌーに乗つて魚をとつて生活を立てて居ります。

一體小笠原島はいつから日本のものになつたのでせうか。それを少し調べて見せう。口碑によりますと、小笠原群島は今から約三百五十年前後陽成天皇の文錄二年に信州松本の城主小笠原貞頼が、新領土開拓の意氣を以て南海に船を進め遂に發見したものを、徳川家康が發見者の名を冠して、小笠原島と命名したと云ふのであります。父島には今、島の發見者としての貞頼を祭つた小笠原神社があります。併しこの口碑は歴史的にどうも疑問があるとされてゐます。文錄二年と云へば秀吉の朝鮮征伐の最中で、出征した貞頼がわざわざ陣中、船を南海に進める暇があつたらうかと云ふのが一つの疑問とされてゐます。

其後寛文十年に紀州の船頭長右門が嵐に流されて、小笠原に漂著し、後歸國して、幕府に島狀を具申しましたので、幕府は延寶三年に長崎人島谷市左衛門等に命じて巡航させましたが、その時はただ形勢を探ぐり物産を収めさせただけでありました。さうからしてゐる中、天保元年に、伊太利人や米人の男女二十名がハワイ島から、小笠原に移住して來ました。これが現在の歸化人の祖先達です。それ迄小笠原は全然無人島であつたのです。

嘉永元年には米使節ペルリが日本へ來航する前琉球よりこの島に來て、探險や測量をし、山野に牛羊を放ち、父島には米艦の爲めに貯炭所をさへ設けました。幕府が鎖國主義を固執して太平の夢をむさぼつてゐる間に、日本領土にはかうして、外國侵略の手が刻々に伸びてゐたのであります。幸ひにペルリのこの行きすぎたやり口は英國の物議をかもし、兩國の間に小笠原島領有

に關する主權争ひが起りました。

その時ペリリは、小笠原島は米國領でも英國領でもない。最初の發見者は日本だと日本に主權のあることを云ひ立てました。流石の幕府でも愚圖愚圖してゐると小笠原は外國に取られてしまひさうなので、遂に文久元年十二月四日外國奉行水野筑前守忠徳一行を威臨丸に乗せて小笠原巡察の途に上らせました。

威臨丸は同月十九日父島に著し、忠徳等は直に日本國旗を旭山の頂上に掲げ、住民を集めて、日本領の宣言を爲し、各種の法令規約を定め、群島の一つ一つに名稱を付しました。父島、母島、兄島、弟島、姉島などと云ふ名前には、その當時忠徳等に依つて命名されたるものであります。その後明治の大御代に移り、東京府下に直屬して八丈島から多數の移民を送つて専ら南方諸島の開發に従事させました。

前から住んでゐる西洋人達はこれを日本

に歸化せしめ、日本臣民として服さしめま

した。歸化人と内地人との間にはその後だんだん結婚をお互ひにして居りますので、今幾代か経ちましたなら、彼等の風貌も全く日本人と異ならぬやうになるのでせう。

太平洋の眞中にぽつんと粟粒ほどの大きさに浮び上つた小笠原群島も、近頃はだん／＼人口が増えて賑かになつて参りました。その多くは無入島ですが、父島母島のやうに、人の部落を作つてゐる所では一ヶ月に僅か二度入港する船を戀しがつて、汽船が入る時には、用のない人達まで、皆濱に出て迎へます。そして、船が運んで来る内地の香りをなつかしんでゐます。

小笠原の景色のよいことは想像以上です。ことに母島の沖港から、前面の丸島、双子島、向島、姉島などを見た時は、佛蘭西の油繪を見るやうだと思ひました。

「こんな美しい島に吞氣に住みたい」と思はず洩らしたら、島の人が、

「自分達も此の島をととても愛してゐるが、

ただ病氣になつた時、病院はなし、醫者は父島に一人か二人居るだけだから、とても心細くなつてしまふ。内地の醫者に見せようと思ふ時には大抵病氣は重くなつて、船では乗せて呉れないし、よしん

は無理に乗せて貰つて出かけた所で、東京へ著かない中に死ぬ位が落ちた。天然の樂土で、氣候はよし、食物は單衣で済ませれば濟むし、食物も、野菜、魚肉に

困らぬが、醫者のないことだけは困る」と語りました。併し士著の人達は健康そのもののやうな有様で、恐らく病氣などめつたにせず、してもすぐ自然になほるのではないかと思はれるやうな風でした。

私共は同じ府下に屬する小笠原島について、今まで餘り知らな過ぎました。將來は太平洋防備の第一線ともなるべきところだと、十分の關心を持つて同島の開發を望むべきだと思ひます。



さよなら

さよなら

さーよーなーら

里子ちゃんは、ハツとして四邊を見まはしました。廣い原つばを前にした大きな森のふちです。きれいな水の流れてゐる川が、その森のふちを、うねうねとまがりくねつてゐます。いま里子ちゃんは、その川にそつた道があるいてゐて、ふつと、この聲をきいたのです。

「誰かしら？」

けれども、人は、道にも、原つばにも、森にも、見えません。

秋のはじめで、でも、あつい晝でした。お日さまはギラギラ輝いてゐて、まつ青なお空が、きれいにすんでゐます。里子ちゃんはさしてゐるまつ赤な日傘を、かたむけて、耳をすましました。

た。

カラカラ

カラカラ

櫻の葉つばが、ヒラヒラと散つて、きれいなお氷の上にうかびました。

「あつ、さうだわ」

里子ちゃんは、いきをとらして、耳を立てました。葉つばです。葉つばが散つて行くとき、

さよなら

さよなら

と言つてゐるのです。

「まア」

と里子ちゃんは、ヒラヒラと散つて行く葉つばを、眼で追ひました。お別れの言葉をいつて、葉つばは、お枝から落ちて行くのです。

里子ちゃんは、今まで一どだつて、葉つばがものを言ふのを、聞いたことはありませんでした。でも葉つばは、

櫻の葉も、桐の葉も三角楓の葉も、みんなが、お枝をはなれるとき、「さよなら」を言つてゐます。

里子ちゃんは、黄ばんだ葉っぱが、青いお空を、ヒラリ、と飛びちるのをちつと、いつまでも、いつまでも、見つめてゐました。

と、こんどは思ひもかけない頭の上で、

「まア、あなたは、まだゐたんですか」といふ聲を聞きました。

「えゝ、お別れに來ました」

やさしいすんだ聲がおへんじしました。

見ると、一匹の蝶々が、たいぎさうに、ヒラヒラと飛んで、木連の大きな葉っぱにとまりました。きれいなあげはの蝶でした。でも、今では、大へん年をとつて、羽のさきはすりきれて、きのどくなほど、つかれてゐるやうす

でした。

「よく來てくれました」

「えゝ、かうして、皆さんのところへ

お別れに歩いてゐます。いたづら者の雀に追ひかけられたとき助け

ていたゞいたバラさんのところへも、あんまり遠くへ行つてお家へ

かへれなくなつて一と晩とめていたゞいた櫨の木のお爺さんのとこ

ろへも、黄金虫にいちめられたとき、助けていたゞいた甲虫の小父

さんのところへも、それから、すゐぶん、方々を歩きました。」

「そりや大へんですね。ゆつくり休んで行きなさい」

「えゝ、ありがたうございます。小父さんには、夕立のとき、いくど

も助けていただきました。ありがたうございました。またらい年、

私たちのなかまがまゐります。

どうぞお宿をかしてください」
「あゝ、いゝですとも。いつでも喜んで、かして上げますからね。」



木蓮の小父さんは、さういつて、葉つばをブルブルとふるはせました。まだ、木蓮の葉つばはまつ青で、一枚もお枝をはなれやうとしませんでした。でも、そのはずみに、あげはの蝶は、思はず手をはなしました。

「あゝ、とりやいけなかつた。ごめんなさい」

「いゝえ、うつかりしてゐたものですから」

あげはの蝶はさういつて、まだ葉つばにとまりました。

「つかれてゐますね。まだ行く所があるんですか」

「えゝ、もう一軒、ホラ、森のはづれに、赤い屋根のお家が見えるでせう。

あそこまで行きます」

「だいぶありますね。お花畑にでも行くのですか」

「いゝえ、里子ちゃんといふ、お嬢さ

んのところへ行くのです」

聞いてゐた里子ちゃんはビックリしてしまひました。それでもだまつて、ちつと立つてゐました。

「しんせつなお嬢さんですの。そのお嬢さんのお兄さんにつかまつたとき、助けていただいたので、を別れに、行つてまゐります」

里子ちゃんは、デツと蝶々を見あげました。そして、黄色い、やぶれてゐる羽根を見てゐるうち、ふつと暑い日の出来ごとをおもひ出しました。

夏のお休みもすぎて、學柄がはじまつてまもないころでした。お庭を歩いてゐますと、きれいな黄あげはが、飛んで來ました。

「やア、珍しいぞ。標本にするんだ」

お兄さんはさう言つて、網で捕つて毒つぽへ入れやうとしました。その時

里子ちゃんは、急にかはいさうになりました。だつて毒壺の中へ入れられたら、蝶々はすぐ死んでしまひます。

「お兄さん、かはいさうですから、逃してやつて下さい。お兄さんは、黄あげはは、いく匹も持つてゐるでせう。それに、その蝶々、羽根が破けてゐるんですもの」

里子ちゃんは、さう言つて、せつかくとつた蝶々を、お兄さんにいたゞいて、にがしてやりました。

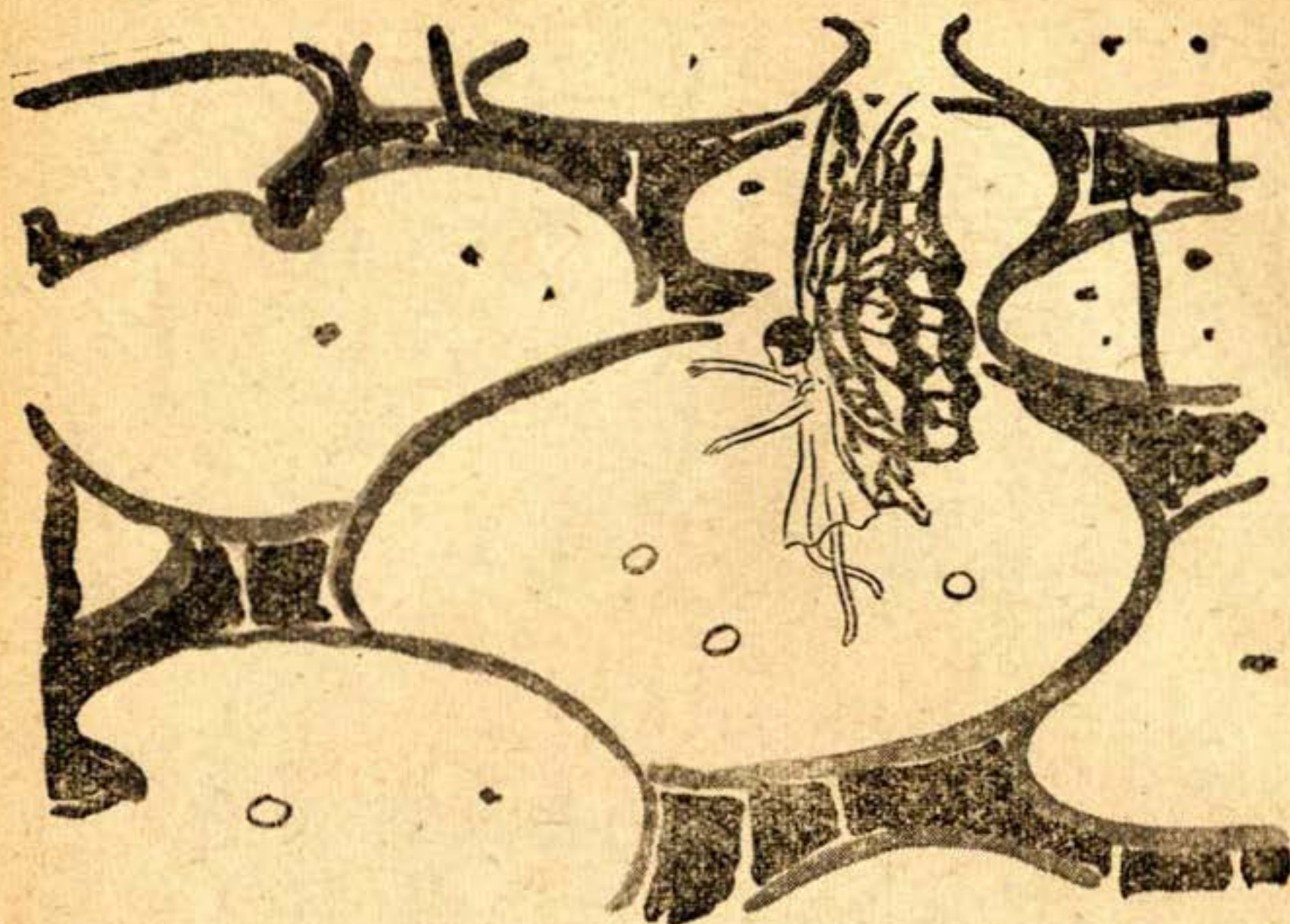
里子ちゃんの眼のまへにゐるあげはは、その時の黄あげはに、ちがひありません。さう思ふと、里子ちゃんは、きふに、

「黄あげはさん、里子はこゝにゐますよ」

と大どろにいひました。

「まア」

と蝶々は、ビックリしたのと、つかれ



てゐるのとで、バタリ、
里子ちゃんの眼の前に落
ちて来ました。里子ちゃ
んはしづかに蝶々を、手
の上にのせました。

「まアお嬢さん。ちやう
ど、しあはせでした。私
もう飛べないほど疲れて
ゐます。でも、お禮を申
しあげなくてはと、こゝ
までまゐりました。いろ
いろありがたうございま
した。また私のおなかま
が、らい年まゐります。
いぢめないで下さい。お
嬢さまのおやさしい心に
は、心からお禮を申しま
す。」

「そんなこと、いいの
よ。でも、蝶々さんは疲

れてゐるんでせう。飛べないんでせ
う。どこかへ行くところがあるんです
か」

「はい、南の方へ、森をこえ、町をこ
えてた南の方へ行きます。」

「でも、行かれて？」

「えい、おせわになつた皆さまへ、お
れいを言ひさへすれば、力が出てまゐ
ります。どこへでも、飛んで行けま
す。ホラ、ごらんなさいお嬢さん、飛
べるでせう」

ほんとに、蝶々は、きふにげんきに
なつて、里子ちゃんのまはりを、ヒラ
リヒラリと飛びまはりました。

「まアすてき。飛べますわね。よかつ
たわ」

「では、さよなら、お嬢さま、有りが
たうございました。」

「さよなら、蝶々さん」

「さよなら」

「さよなら」

蝶々はげんきに、まつ青なお空の中へ飛びこんで行きました。

里子ちゃんは、ふつと眼をさました。

硝子ばりの、あつたかいヴェランダの藤椅子に腰かけたまゝ、里子ちゃんは、ウトウトと睡つてゐたのでした。頭の上には、鉢植を大きな椰子の葉が繁つてゐて、日傘のやうに、お日さまをさへぎつてゐてくれました。

「まア、夢だつたのかしら？」

いゝえ、夢ではありません。里子ちゃんのかはいゝ足のそばに、一匹の、

羽根のやぶれた蝶々が、落ちてゐます。

「まア、きつとこの蝶々が、私に、お

話ししてくれたんだわー

里子ちゃんは、さう言つて、あげはの蝶をひろひあげました。そしてしばらく考へてゐましたが、やがてお庭へ出て行きました。

お庭にはお池がありました。

そのお池の水は、小さな川になつて、お屋敷のへいの下をくぐつて、野原の方へながれてゐました。

「この川は、きつと南の方へながれて行くんだわ」

蝶々は、南の方へとんで行く、と言

つてゐました。さうすると、きつとこの小川といつしよの方へ、行くにちがひありません。

里子ちゃんは、お庭にある木蓮の、一ばん大きな葉っぱをちぎつて、お池へうかべました。

そして、そつと、あげはの蝶を、そ

の上に、のせました。

葉っぱのお舟は、しづかに、うごきはじめました。そして、やがて、川のながれにのつて、しづかに流れはじめました。

「蝶々さん、さよなら」

里子ちゃんは、それこそ、みんなが聞いたらびつくりするほどの大きな聲で、さういひました。そして右のお手々を高く上げて、グルグルお別れのあいさつをしながら、だんだん、遠くへ流れて行くお舟を、見おくつてゐました。

(をはり)

大戸喜一郎
齋藤清畫



の 中 支
旅 西 瓜 の 種

野 島 宣 道

内地では風薫る五月ではあつたが、上海では風の薫る感じはしなかつた。五月も半ばのある日であつた。軍用のトラックに便乗させてもらつて、上海戦中もつともその激戦を物語る大場の戦跡や、その附近の英霊の

お墓をおがんでまはつた。大場鎮は江湾鎮の西方にある大部落で軍事上重要據點の一つであるさうな。風を切つてトラックは進む、その上に軀をおどらせながら、とみかうみして、戦の當時を偲びながら哭行の線路を超えた。道は坦々、車はひたすら進む。左手に空閑少佐の墓、林聯隊長の墓を拜しつゝなほも進む。

場鎮、實に立派な表忠塔の建てられてある廣い廣い公園の前に立つ。青草一面に茂る宏大なる庭園、或者は塔婆、或者は線香を手にしながら黙々と塔に向つて歩む。廣い、高い石臺の上に石階を登る、仰ぎ見る表忠塔、偉観、宏壯。

つては大きな建物が衰れにも蜂の巣をつゝいたやうな残骸をさらけ出してゐるのを見て、その激戦を想はしめられ、郊外に出ては、夏草茂る畦や田に、淋しくも且つ雄々しく墓標の立つてゐるのを拜んで、その無比の壯烈さが彷彿と浮んで來るのを覺ゆるのである。その眼前にすばらしい表忠塔がこれらの一切を語りきかせるが如く建つてゐるのである。

見よ、雄渾の筆致「表忠塔」

は、陸軍大將松井石根閣下の揮毫になる。大場鎮一圓はいふに及ばず、遙かの彼方まで見渡される高臺の上に、低頭合掌、心中無限の感激を覺えながら、靜かに南無阿彌陀佛が繰り返される。願くは諸英靈よ、永遠に護りたまへ。捧ぐる一炷の香は微なりといへども、今踏むこの大地の底に何かもり／＼と威神の力のもり上がり来るのを私は覺える、尊い白骨を藏する聖なる大地から私の血の流れの中に、み民われの向ふべきを示唆する見えざる氣迫を感得する。

大場鎮陷落

惡戰力闘三閱月
包圍拔壘斃不已
神哉敵陣旭旗飄

欲餞忠靈幽寂裏

石根

賽者語らず、塔の周圍を默々徘徊、再拜三拜、やがて下向、車は將軍の名も床しい畑路を吳淞鎮の砲臺へと急ぐ。

吳淞へ畑路ますぐや花菱

蘇州は杭州と共に山水明媚の都として名高い。柔かい落ち着いた水都の情趣は香りの高いものがある。古い吳の國の都であったためでもあらう。城内の獅子林などは廣壯典雅な庭園で吳王佚樂の跡をしみじみと受取るのである。城外には餘りにも有名な寒山寺がある、張繼の楓橋夜泊の時、「月落烏啼霜滿天」を思ひ起して日本的な感情に耽る。

或日の朝、馬車を驅つて城外の虎丘山を訪ふことにする。「浪漫的」といふ言葉がある、支那の人間性を表現した恰好の語である。悠暢な顔付きの御者がこゝまで來てもやつぱり顔の長い馬の尻をたゝきながら、わからぬ言葉を交しつつ三臺の馬車を御して續く。石道をかつかつと馬蹄がひびく遙かに虎丘の廢塔がそそり立つてゐる。空はあくまで青である。馬車はゆつくりと急がぬ御者の心を傳へて進む。車上の旅人また漫々たるたざるを得ない。

ふと見る支那の少輩七八名、この馬車を見出すや小走りに追ひすがり来る。四五歳あり、八九歳あり、皆跣足、弊衣である。彼等は異口同音に「先生進上」

とつぶやきながら来る。乞食である。旅人と見るやこの少乞食は馬車の速度にあはせてどこまでも従いて来る、つぶやきながら走り、走りながら呟やく、御者かへりみず、旅人また顧りみない、然しながら彼等は止めない。だん／＼息せきながら、つぶやきは哀調を帯びて来る、泣くが如く、訴ふるが如く、悲しむが如く、告げるが如く、精根のかぎり盡すかの如くである。聞く者の心根に、錐さす如く感ぜしむる、乞食衆も手に入つたものである。けれどもいかにか銅幣を投げさせるからえらいものである。投げ與へられた一枚の銅貨は彼等の爭奪の具となる、肉弾相搏つて相争ふ。獲たものはけりりとして走ることを

止め、得ぬものは更らにひしめ
きながら續くのである。空はあ
くまで青である。虎丘山の境内
に到れば、今度は男女の少輩一
度に旅人を取りまいて、物賣り、
案内の押賣りに客をして啞然た
らしむるのである、狼のあご
を逃れて虎に追はるゝ煩であ
る、かくて夢の國、懷古の郷と
うたはれた蘇州の城内外は、今
に至つて乞食の國、物賣りの國
となり、漫々の特徴は馬車の
上に空を見上げ馬の尻を見つめ
る時にのみ味ひ得るばかりであ
る。

茅花野や蘇州城外馬車憂々

山河千里の彼方に郷土の人に
遭ふといふことはなんとしても
なつかしいことである。まして

それが聖戰に従つてゐる我郷土
の勇士であるに於ておやであ
る。

明日から郷土部隊を訪ふこと
を許された歡びにふるえながら
先づその地區に斃れた勇士の墓
地を拜むことにする。下士の御
案内で数多い墓標の前に額く、
かんかん照りつける強い太陽の
下に立ちのぼる香の煙は淡い、
一霊一靈と回向を献げつゝ、祈念
感謝する、かへりみれば我がう
しろに案内の下士は直立不動、
長い回向の間、舉手注目、禮を
献げてゐる。おう、この嚴肅、
この感激。生ける者も死せる者
も墓標を境として一枚の境地で
あることに頭が下がる。

長江をさかのぼつて安慶に近
づいた者は大いなる塔のそゝり

たつことを見失はないであら
う、迎江寺である。

九層の塔を螺旋狀に登つて高
高と一帯の戰跡を眺むる時にこ
のあたりが青田の向ふの山陰に
は猶敗敵のこもるといふのにと
の落ち着きを見せてゐるのが何
とも頼母しい次第である。

敗敵のなほのこる山夏霞

迎江寺では、今、日没の勤行
中である。二十名程の僧が戰
の庭の坊とも覺えず、み佛を拜
禮し、或は高く或は低く、誦經
の聲をうち立ててゐる、寂靜で
あり、超塵域である。心涼しき
一刻である。

支那寺のみ佛涼し僧拜跪
支那寺の塔にのぼれば塔涼し

廊を歩めば寒者の眼に訴ふる
達筆の訓言が貼られてゐる。

靜以修身儉以養德
又、

驕慢之言甚于饑寒
然り。驕慢の言葉は饑寒より
も恐ろしい。大坊の外には悠久
幾千年、漫々として長江が流れ
てゐる、支那興亡の歴史の何事
も知らぬが如くに。

坊主名號の一筆を書いて私に
贈る、曰南無阿彌陀佛、墨痕は
まだ乾かぬ。西瓜の種をつまみ
茶水を喫しながら私は靜かに眼
目して、明日から會ふであらう
郷土のなつかしの勇士たちの汗
のおもてを臉に畫いてゐたので
ある。

(筆者は總本山布教師、俳名を無量
子と云ふ)



北海の同信と結ぶ

佐藤賢順

北海道奥地の旅が四五日續いた。函館、江差の講演を済ませて北上した私達は、白老にアイヌ部落を訪れてから、登別、旭川、上川、層雲峡、美幌、屈斜路湖、阿寒湖と慌しい見學の旅を續けて、大樂毛から根室本線で帯廣、下富良野を廻つて再び旭川に戻つた。

その彼方に重疊と起伏する大山系を、夕焼が茜色に染めてゐる日暮もあつた。眞夏とはいへ秋そのまゝの冷さである。北海道奥地の旅は寂しい。

この寂しさはこの地の大自然が餘りにも雄大で、人間との距離が大きい過ぎて、とうてい自然を樂しむなどといふ内地風な考へが當て嵌らないことにもよろう。然し結局は、この寂しさはこの地方に歴史が乏しいことに基くのであらう。歴史的文化が人間に與へる温みといふものは、量り難く大きい。北海道の歴史は大方は新しい開拓の歴史であつて、私がこの旅行中に耳にした古い説話といへば、大雪山方面で聞いたアイヌの部族と部族との闘争の説話か、屈斜路湖と積丹半島の縄無意とに残つてゐる義經傳説位のものであつた。旅行者は遠い過去と現在とを繋ぐ羅網をぶつつりと切られてしまつたやうな氣がして、懷古を樂しむこともできず、先人の息吹に觸れる手掛りもなくて孤り大自然の中へ放り込まれ

た寂しさを味ふのであらう。然し長い旅行の間に、私達はこの歴史や傳統のないことに慣れ切つてしまつた。そして旅行の終り頃になつてはあつたが、結局この歴史に乏しいことが却つて五月蠅くなくて氣樂だといふ氣持になつたのである。歴史と傳統に豊かな西日本を旅すると、至る所で由緒を聞かされ縁起を聞かされる。初めは色々丹念に聴取つて、祖先の殘した文化を充分に味はふとして熱心になるが、仕舞ひにはどつちを向いても「歴史」ばかりなので、とうてい其の煩はしさに堪へられないほどになる。それかといつて折角殘された民族の誇りを見落すといふのも氣が濟まないし、といふ重苦しい負擔を感じて厄介な心持になる。北海

道の旅にはそれがない。結局この方が気が楽である。北海道の人々が大まかでさばく／＼してゐるのも、傳統や歴史に束縛されることが少く、凡てが自らの開拓の歴史であるからではあるまいか。

奥地の旅で、私はこんなふう
に北海道を把へながら、八月十五日の夕刻小樽へはいる豫定で中村先生と共に車中にあつた。

札幌驛では熊々小樽から出迎へて下さつた平井善慈氏が車中へ乗込んで來られた。平井氏は小樽の直行寺の檀徒で、別に自分では家支部を作つてゐる熱心な同信である。ほんとうの名は善次であるが、後年善慈と改めたのは、せめて常にかういふ文字を書いたり眺めたりしてゐれば、心持もその度に自づと其の

方に向ふであらうと考へたからである、後に話された。今度の北海道巡錫は、實は平井氏と直行寺の淨友會の熱心な懇請が動機となつて、計畫され具體化されたのである。

やがて車窓には小樽の風光が開け、右手には石狩川西方の山岳が遠く望まれる。波浪が高く魚船は僅かしか見えない。近年は鮭漁は皆無で魚業は全く昔日の影がないと平井氏が語る。南小樽驛へ着くと天上寺の石上皆應老師と博應師とが出迎へられて、茲で下車して天上寺支部へと向つた。天上寺は入船町の高臺に在る大伽藍で、遙かに小樽灣を望み、石上老師が草創して經營二十九年、輪奐殆ど備つた老師苦心の結晶である。老師は八十五歳、而もなほ矍鑠

として文字通り壯者を凌ぐ元氣である。年輩から言へば老師の半ばにも及ばない私などの爲に何かと世話を焼いて下さつて何とも恐縮であつた。小樽での巡講の日程は、殆んど老師のお骨折で出来上つてゐた。夜になつてから再び平井氏も來訪されたので、老師、平井氏と詳細の打合せをした。

八月十六日 朝から雨であ

る。それが次第に激しさを増して、晝近くなると風さへ加つて暴風雨になつた。小樽地方巡講の第一日が午後から天上寺で始まるのであるが、この雨では如何にしても會衆は集れないであらう、生憎なことである、と老師も私達も氣遣つてゐたが、雨と風は加はるばかりであつた。

それでも熱心な檀徒は、一時近くになると殆んど濡れ鼠になつて、三々五々集つてきた。一時半私が講話を始めた頃には、八十人以上の人が集つてゐたので驚きもし勿體ない氣もして、その熱意に酬ひる爲にも、自然話にはずんだ。中村先生が引續いて一時間の講話。先生は、この地方の氣候に慣れない爲であらう、十日頃から風邪を惹かれて奥地旅行中は微熱さへあつて、まだ本當ではないのだが、平易な例話と熱心な口調で懇切に淨土教の奥義を述べられた。講話が済むと四時頃から施餓鬼法要が嚴かに行はれた。

夕刻になると雨は止んで、流れ飛ぶ斷雲の間に時々青空が見え始めた。

この暴風雨にも拘らず講演會

も施餓鬼法要も意外に盛大に終了したのにホツとせられたのであらう、石上老師は夕食の時、瀧面に喜色を湛へられて、八十五年間の辛苦の物語を興味深く語られた。青年時代に随従した行誠和尚の學徳、明治九年、二十二歳で北海道開教に渡道した頃の話、初代管長鶴岡徹定上人が北海道へ巡錫されて江差へ赴かれた折に扈從して、豫て習ひ覺へた乗馬の術が役立つて、徹定上人から中啓を賜つた話、古平港顯雄寺の開創など、興味は盡きない。私共が僅かに明治佛教史料を通じて素描してゐる行誠、徹定の教績が髣髴とせられ、苦心慘澹たる明治初年開教の歴史が繰り擲られる。

古平には二十九年、天上寺も二十九年になります。いや、一向に何事も致しませんうちに、年を老つてしまひました。」

私は老師の物語を聴きながらその慘澹たる勞苦と熾烈なる信火が、更に幾倍かにして向けられたならば、瀧蒙支開教の實績が擧るであらうかと、その困難さを想つたりした。身心共に惹き締る思ひのする宵であつた。

八月十七日

昨日、緑町直行寺の野村老師が見えた時、打合せであつたので、中村先生はその方へ行かれ、私は小樽から三十分程の忍路(余市郡)へ行く。

とになつてゐた。

直行寺での午後の講話も、百名程の集りがあつて盛會であつたさうである。忍路の大忠寺(松尾謙昌師)も老若とりどりであるが七八十人の人が集つた。忍路は追分筋の「忍路高島及びもないが……」の唄で名高い忍路灣に沿ふた小さい部落であるが篤い信仰に育くまれた土地である。

午後七時から直行寺で淨友會の座談會が始つた。この、野村老師は石上老師と並んで北海道開教の雙璧で九州から單身渡道して、無佛地の開拓、新寺の草建に辛苦を續けられた。それが實果を結んで、この近傍一帯には純一な信仰の氣分が漲つてゐる。淨友會もかうした氣分の結晶に外ならない。

南野會長、平井氏其他豫てから「淨土」を通じて結ばれてゐる會員が三十人程集まつた。會員の一人が唱導となつて阿彌陀經を讀み一會の念佛の後座談會に移つた。座談會であるから別に講演といふ程のことはないが、何か話の緒口を引き出す爲に南野會長の紹介で、中村先生が「それではお念佛の話でも致しませう」と話し始めた。

入信の體驗談である。話の内容は曾て私も二三度聴いたことがあつたが、今夜ほど眞摯に卒直に熱情を籠めて正面から話されたのを、聞いたことがない。皆感に打たれた。何の遠慮もなく氣がねもなく、信仰體驗を露呈される。(何の遠慮もなく、といふと變に聞えるが、初めて話を合せる大勢の大衆に對して話

をする場合には、肝腎の中心の話題まで誘導するのに骨が折れたり、大勢となるとその全體の氣分を統一するのに、特殊の技術が必要であつたり、つまらないことに氣兼ねをする。相手が毎々「淨土」を熱心に讀んでゐる人達であるから、そんな氣苦勞が要らないといふ意味である。

中村先生の話が色々な話題を惹き出して、南野氏、平井氏、石上(博)氏などから、「極樂の實在」に就いて、「靈魂の行衛」に就いてなど數項の質疑があつた。先生が一々丁寧に答へられた。會員諸氏の要求してゐる方向が、宗教の純粹な中心點に向つてゐるのが解つて嬉しかつた。座談會は十時半まで續いた。みな銘々に、自分を見詰めた。

ながら歸つてゆく。野村老師、平井氏など、夜半まで話す。

八月十八日 淨友會の會員午

前六時參集。佛前で念佛、回顧。今朝は私が四十分ほど話す。集りは昨夜の人達で、若い人が多い。中村先生が昨夜は淨土教信仰の最も内包的な話をされたので、私は外延的な話をして、淨土教が全佛教の中で、いや全佛教のみならず一切の宗教の中で最高峯に位し一切を揚棄してゐる所以を、時間がないので筋道だけであつたが、一通り話した。それが済むと私だけは八時の汽車で余市町へ赴くために、朝食もそこそこに出發した。數人の會員が残つて中村先生を中心にして座談會が續けられた。

余市町は小樽から西へ六里。

町の中程を余市川が流れ、瀟灑は瀟灑かで、遠くシリバ崎を左に望み、山手にて林檎島が多く余市林檎の産地として名高い。人口一萬九千餘、後志管内では第一の町村である。講演は山沿ひの寶隆寺で午前十一時からの豫定であつた。控室へ通される

と床の間に大正大學々生主事であつた堀定正君の在米中の寫眞が飾られてあるので驚いた。堀君とは同窓であり、彼がアメリカから歸つて大正大學に奉職するやうになつてからは、親しく往來してゐた。昨冬惜しくも四十歳の若さで世を去つたのである。寶隆寺の寺井孝哉師は昨年樺太開教區からこゝへ就任したのであるが、堀君の法弟であると聞いて、意外の因縁に一層驚いたのである。

大きな本堂には殆んど立錫の餘地のないと言ひたいまでに、參詣人が集つてゐた。一時間餘に及ぶ講話を皆靜かに聞いてくれた。

中村先生は午後小樽市外熊磯の長昌寺(麻上成延師)の講演に赴かれた。

この夜は平井氏の特別の御厚意で、定山溪へ案内され、野村老師、中村先生と四人で、久々で寛きながらゆつくりと話をすることが出來た。

八月十九日 定山溪は既に秋

色豊かで、ないかまど、いたやもみぢなど紅に色づいてゐるのを見受ける。白樺の林を渡る風も冷たい。潺湲と流れる溪流の清冽な水は、なほさら冷たい。今度の事變で傷いた傷病兵が澤山こゝへ療養に來てゐるが

若い兵隊さん達の白衣の姿、纏帯の色が痛々しく目に染みる。今更のやうに事變の深さが察せられて、頭が下る。

一帯に北海道は事變色が濃厚で、緊張の度も一段と高い。どの列車も出征、應召、歸還の勇士、それを送る人、迎へる人で混雑を極めてゐる。驛々に婦人會の甲斐々々しい姿を見かけた。いことはなかつた。

定山溪よりの歸途、野村、平井兩氏と別れて、札幌南六條の新善光寺に本會の理事、安富賢亮師を見舞つた。實はもつと早く尋ねたかつたのが、全く寸暇がなかつたために延び延びになつてゐた。安富師は、實は今日誰か代理を差向けようと思つてゐたところだ、と私達の突然の往訪を非常に喜ばれた。すつか

り元氣になつてゐられるので安心した。一時間程で辭去して、午後の講演の道場錢函村（札幌）と小樽の中間の淨土寺（長尾耕導師）へ向ふ。

驛には長尾師ほか三四の方が出迎へて下さつた。所々に貼られたポスターが目につく。こゝでは私と中村先生とがそれ／＼四、五十分づゝ講話をした。滿堂の參詣者であつた。

小樽へ歸つて直行寺に宿る。

八月二十日 私だけ朝の汽車

で積丹半島の古平町へ行く。

古平は余市驛まで汽車で行つてそれからバスで山道を二時間餘、九十九折どころではない三百何十折とかの曲りを曲つて、峠を四つ越して行く難所であると聞いた。明朝は一路歸京する

豫定になつてゐるので、今夜は古平へ一泊して、明朝は余市驛で、小樽から乗車してくる中村先生と一しよになることにして直行寺の人々ともお別れをして出發した。中野正秀君が送つてくれる。

この午後、中村先生は市内稲穂町の無量壽寺（松尾光蓮師）で百人程の人々の爲に講筵を張られた。夜は直行寺で淨友會々員の座談會を催された。

中野正秀君に就いては書き置けたが、野村老師の門弟で、曾て大正大學在學當時、私の寺から通學してゐた、今は瀬棚町（小樽から汽車で五時間）に就任してゐるのを、態々來て、十七日以來直行寺に滞在してゐる。今度は色々なことで厄介を懸けた。本會の井原文雄君と一しよに

「大法輪」編輯部にゐたこともある。そのうちに中野君のユーモア文學が「淨土」を飾るであらう。

古平への山道は聞きにし勝る難路であつて、迂餘曲折何百回或は上り或は下る。道端には秋草が亂れ咲いてゐる。名を知つてゐるのは紫陽花に似た白い花のさびた淡紫のふじばかま、黄色い女郎花ぐらゐのもので、大方は見たこともない花である。植物のことをよく知つてゐたら、どれ程面白いであらうと奥地を旅行してゐる頃から、度々考へたことである。

古平は海沿ひに延びた大きな町で、人口も一萬を超えてゐる。今日の道場願雄寺は山腹にある堂々たる伽藍で、小樽の石上老師が約六十年前に草建した寺で

ある。現在の石上文耕師は老師の高弟である。「まだ鑑仰會の支部を作つてをりませんが、いづれ近いうちに支部に致します」と師が言はれる。

こゝでも満堂の聴集に一時間、に亘つてゆつくりと話をすることができた。

午後七時から近くの古平尋常高等小學校で古平聯合青年團主催の講演會が開かれることになつてゐるのでそれへ赴いた。北海道には珍らしい蒸し暑い晩である。開會を待つ間、この學校の西下喜一郎先生が、積丹半島の模型を持つてきて、色々と地勢、産業、兒童の就學狀態などに就いて興味ある説明をして下さつた。

七時半頃、校長竹林次郎先生の挨拶があつて、講演を始め

た。青年學校の生徒が主體で其の他合せて約七十人の聴集であつたが、江差町の青年團に話した時のやうな心持で、「時局と信仰」とに就いて、思ふまゝの話をすることができた。時局と言つても、私どもが戦局や國際情勢や經濟を語るべきではない。戦局を語つて軍人に及ばず、國際情勢を語つて通信員に及ばず、經濟を語つて經濟學者に及ばないとすれば、語ることに何の意味あらうか。さうした日々、にまた刻々に、移ろひ變る世相に處するには、變らざるもの、動かざるものを確りと把えなければならぬ。その變らざるものとは佛教の無我奉公の信念である。時局を語るには常にさうした心構へを忘れてはいけな

と私は考へる。

講演を終へて願雄寺へ歸つてからも、夜更けるまで石上師から積丹半島の傳説を聞いた。

八月二十一日 余市中學の寄宿舎へ歸る石上師の令息と朝六時のバスに乗る。これで歸れば小樽までもう一度戻れさうである。早朝を石上師、西下先生が應々バスの發着所まで見送つて下さる。昨日通つた難路を又バスに揺られて餘市驛へ出て、再び小樽驛まで歸つた。暫く待つと野村老師、平井夫妻其の他の方に送られて中村先生が來られた。平井氏の親戚の方でも多數見送つて下さつた。長い間數々のお骨折りやお世話を戴いて、何ともお禮の言葉もない。言葉に盡せぬ心持をたゞ「有難うございました」といふ一言に託して

車窓から首を出して、何度もお辭儀をするより他はなかつた。たゞ感慨無量である。

函館の連絡船では七日の夜お別れをした稱名寺の小川隆誠師がまたお見送り下さつたのでいよいよ恐縮した。今度の巡講は成功といふべきであらうか、講演の回数も多く聴衆も恐らく何千を以て數へることになるであらう。それが然し好果を收めたとは言へない。將來の計畫については、もつと反省して今回得た幾多の經驗と示唆に基いて、更に一般の工夫を凝さねばならない。など、總決算をするつもりで、また今後の巡講を一層意義あらしめるために、連絡船の中で、中村先生といろいろと語り合つたのである。

信仰相談 中村辨康

一切は如來様まかせで進め

問

私は毎時毎念阿彌陀佛を以て「字宙の眞理を悟り究められて、我を全的に根底から絶對に救済せられんとして、今、我前に立ちて説法し給ふ方なり」と觀念して、寄りすがる氣持で念佛を始めます。丁度趙州和尚曰く無一です。私はこの三昧が沐浴したやうに、心身洗淨せらるゝやう覺えます。先生御批判を願ひます。(山門仰精)

答

誠に結構だと存じます。それでおすゝみ下さい。絶對的に歸依渴仰して念佛に勇み行くのは有り難いことです。それをとことんまで貫いて下さい。衷心から御願ひします。

但し「趙州和尚云云」は考へない方がよろしいでせう。趙州の無字は、有無の對立を離

れた「絶對空」の世界で、淨土教の「妙有」の世界とは違ふからです。淨土教では眞言や禪の「唯心の彌陀、己心の淨土」と云ふことは申しません。何處までも指方立相の彌陀淨土を信じて行くのです。光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨を信じて行くのです。我が心の中に彌陀を作り上げるではありませんからです。

また次に「此の三昧」と云はれましたが、それが何う云ふ状態になつて居るのか、具體的な説明がないので判りかねますが、念佛中に「沐浴したやうな心身洗淨感」のあるのは誠に結構です。身心融液とも云つてすつかり融け込んで洗ひ清められた感覺は、精神の統一状態にあらはれることで、さう云ふ經驗者

信仰上の御相談に應じます。御質問はハガキに住所氏名御名記の上、信仰御相談係宛御送附のこと、誌上匿名は可。

も相當あると思ひますが、然しそれは單に途すがらの一風景に過ぎないものです。兎もすればそれに執着して何時も其快感を味ひたいと念願するやうになりたがりませんが、それは邪道に入つたことになつて、其處で足踏みして居る譯です。一切は自分の力でなく、如來様より與へられるもの、善惡共に如來様におまかせして、こちらとしては唯だひたすら「南無」の念を運んで行くだけでよろしいのです。觀念でも感覺でも事そのことに捉はれず唯だ「お慈悲」として有り難く頂いて置くのが本當です。念佛以外の外のことは來るを喜び去るを悲しまず、淡々として水の流るゝが如くありたいです。ではどうぞ御精進下さい。

阿彌陀を體現する

問

浄土八月號の阿彌陀如來とはの問に對する簡にして明なる御解釋は大層結構に拜讀いたしました。就きましては其中に「法藏菩薩は阿彌陀佛に歸一し融合し體現して」とございますが、此中「體現する」とは此場合何う云ふやうになられた事を申すのでせうか。御示教願はれますならば幸甚です。

(京都上京・小林常人)

答

例へば具體的な時計は、元々あつた時計の原理（有ると云つても「物」があるやうな有り方ではありませんが）を發見しそれを事實の上に現はしたからこそ出來上がつて居るのですが、それと同じやうに、法藏菩薩が、宇宙の根本原理である「阿彌陀」を御自分の身に完全に體驗し、それに成り切つて其の智慧の光壽を現はされた時が成佛して「阿彌陀佛」になられた時です。時計の原理と時計の具體とが一致して鐵や眞鍮やニツケルが時計其物になつてその鐵や眞鍮やニツ

ケルが時計の働きを現はした時が時計の體現です。だから私達も阿彌陀佛に歸依信順して幾分でも阿彌陀佛に攝取されて居るならば、其處に一分の「阿彌陀」を體驗した譯であり、幾分でも阿彌陀様の御働きの御手傳ひをさせて頂けば、私達を通して阿彌陀様の御力の一分が其處に現はれたのであるから、一分の阿彌陀佛を現はしたことになるではありませんか。體驗と體現との區別が之で幾分かお分りになりましたでせう。

S.S.S.

金はンペ金
亂賣にンペ金
優るサエンス合金
すで

金合スエンス合金
！をンペ金



¥150以上

★ サエンス・合金 萬年筆

小生昨年九月號より御誌拜讀仕り候、その間いろ／＼な逆境に會ふ私におめぐみあたへ下され候、全て「浄土」の諸先生の賜謝感激の喜びに溢れ居候尙々後共拜讀に心がけ良い日本人になる様共に御援助下され度候、（愛讀者）



如來様の子になつて

日常勤行式解説

中村 辨 康

(十三) 總 回 向

(己を空ふして一切の人々と共に佛道を歩まんとす)

願以ニ此功德ニ 平等施ニ一切ニ

同發ニ菩提心ニ 往生安樂國ニ

(觀無量壽經疏玄義分ニ出ツ)

(和 譯)

願くは此の功德を以て、平等に一切に施し、同じく菩提心を發して、安樂國に往生せん。

(意 譯)

どうぞ、些かなものではありませうが、今まで偈文を誦し、聖經を讀み、如來様の御名を稱へて、出来ないながらも心を澄

講 贊

まし、如來様へ心を傾けて、信仰への精進をしてまゐりました此の功德をもちまして、他の大勢のあらゆる人々へ、平等にお捧げいたします。それは決して私の力の及ぶところではありませんが、せめてもの志を御汲み取り下さいまして、皆様の氣持がみ佛の道へ向くやうにお力をお貸し下さいまし。さればもう既に致せられた過去の諸靈を初めとして、現在の人々、これから生れて来る人々と、皆な均しく御一處に菩提を求め、心めざめゆく志を發し、遂には如來様の御國、安樂の世界に往き生れて、眞實の喜びを味ふ身となりたいものでございます。

元とより凡夫の身であるから、此の功德と云ひ得る程の自負心

の有り得やう筈は無いかも知れないし、またさうした自惚れも持つては居ないのであるが、それでも此「おつとめ」を通してだんだん私達の心が如來様の方へ如來様の方へと傾き、如來様に歸依合掌し、如來様の御名を戀ひ慕つてかくの如くお呼び申し上げることの出來たことは、此上もない幸ひであり悦びであつて、その喜びの中に菩提への道を一步一步と履ませて頂いて居る譯でもある。

是れ即ち、誠に些かで數へるには足りないものであるけれども少くとも私に與へられたところの「功」であり「徳」であると云つて敢へて過言ではないと思ふのである。

然しそれは決して私一個人の専有すべきものではなく、他の人への眞實の幸福の爲に、スツカリ皆様へお分けすべき性質のものである。またお分けしたとて、それは決して減るものではなくお分けすればするほど愈々増大し、益々擴大するものと確信する。

例へば或る一人が一本の蠟燭を持つて居るとする。その一本の蠟燭の光を一人が専有しても一燭は一燭の光でしかない。二人が併用し、三人五人乃至十人が丸くなつて其光を共に使用しても一燭の光が五分の一十分の一に減ることではない。平等に一燭を一燭の光として使用し得るのであるから、五人集まれば五燭の働きとなり、十人ならば十燭の働きをするのである。物質的な光でさ

へ一燭が五燭十燭と増大し擴大して行くのである。況して精神的な「功」や「徳」が分けられて夫々の人の心に光が點けられるならば、五人の人が一本宛の蠟燭を持ち寄つて五燭の光を共用し、十人の人が十燭宛の光を共用する場合、光の効用は五五二十五燭或は十の十倍即ち百燭の價值をあらはすやうに、其「功德」は何億萬倍の効果を示すか分らないのである。

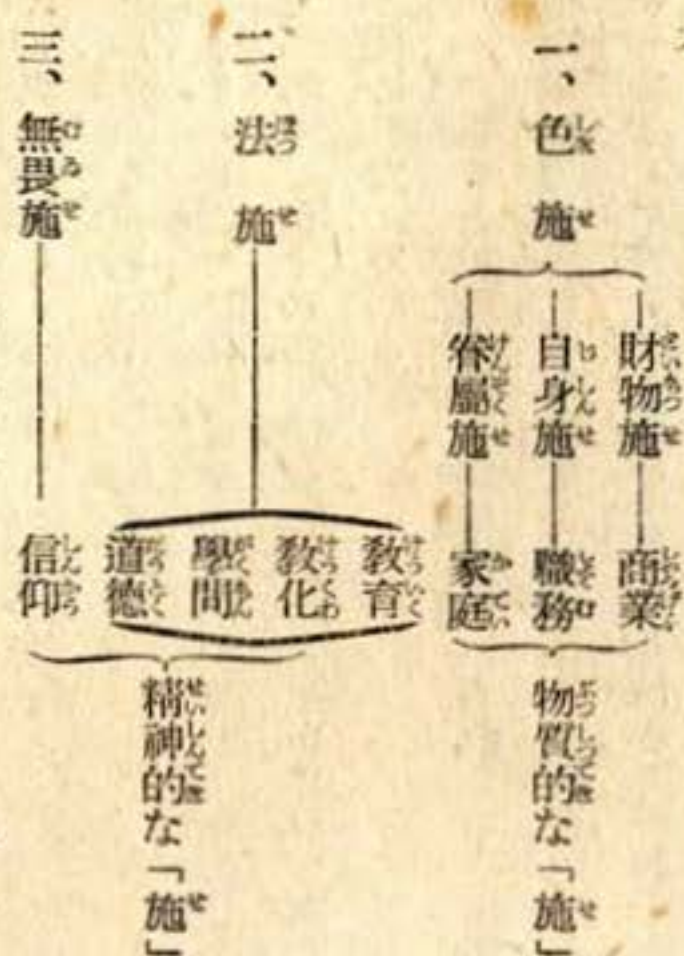
茲に一切に回向すると云ふことの價值があり二重の功德が有り得るのである。

個別的な物質的な觀念の上から云ふと「施す」と云ふことは、甲の所有するものを乙の所有たらしめるのであるから、甲の持ちものが減つた勘定になるのが普通であるけれども、大處高處より見れば、水が低いところに流れただけであつて、謂ゆる「不増不减」であると共に、精神的な生命觀的な見方から云へば、足りなるところを補ひその人なりその物なりを生かし得たのであるからその喜びは到底物質を以て買ひ得ない價值を現はしたことになるので減るところか却つて大きな所得をしたことになる。是は亦た實際に増大されつゝ元へ還つて來る場合が澤山あるのである。

例へば僅かな恩恵を施した事に依て命拾ひをする程の恩がへしを受けたと云ふ類の話は、昔から澤山な實例のあることで嘘ではないのである。無論恩がへしを當てにしての行爲は本當の「恩」でもなく「功德」でもないから、そんな「施」は一向價值をもた

らさないかも知れないが、本當の無我奉仕即ち「捨」の氣持からなされたものであるならば、意外な恩恵を遂にこちらの方に受ける場合が多いのである。もとより「捨」であるから何も来なくても一向差支へもなく、こちらとしては取へて當てにして居る譯ではない。例へば川の水が執着するところなくサラサラ流れて居るやうに、淡々として悠々自適することも出来る。

佛教で云ふところの「施」にはいろいろある。即ち



このやうに三種五種の施などが説かれて居る。そして今の場合に於ける施は精神的な「法施」若しくは「無畏施」に類するものである。

此のうち財物施は品物をやつたり取つたりしながらも、そこに清淨な氣持で其取引きの行はれ行くことをさすもので、一般的には商業道のことであり、特殊的には「喜捨」のことである。一

般に商業は利益中心であると考へて居るやうであるけれども、佛教の教ゆる商業道は、一切の品物（商品でも金錢でも）は天地の恩物であり恩恵の集りであるから、之を大切に取扱ひ之を人に渡すにも拜んで渡し、受取るにも拜んで受取らねばならない。随つて其代金は其物の代金ではなく、其恩物をよりよく飾つた手数料又は其恩物を運搬したり整理したりした手数料として頂くのである。買ふ方でも其手数料をさし上げてから其天地の恩物を頂戴するのである。

即ちそこに正しい「施」が美しい氣持の中に行はれる。之を假りに「賣買行爲」と名付けたのに過ぎないのである。

だから暴利をむさぼることは不徳であり、代金を不當に値切ることも不遜である譯である。かくの如く佛教ではお互ひに美しい心で拜み合つて取引きするのが本當の商業道であると教へるのである。

また「自身施」即ち身を施すとは職務に努力することである。報酬に顧慮せず與へられたる職分は、天地國家社會より分けられたる恵みであると感謝し、それに専心努力することが「自分」の「分」を盡すものとする。

一家の中でも誰か一人が一生懸命に家の爲に盡すならば、其感化は自然に家族の全體に及ぼし、必ず家族の人々が漸次眞剣になつて働いて呉れるやうになる。是れ即ち「眷屬施」である。例へ

ば一軒の家の主人なり主婦なりが骨身をおします。默々として其家興隆の爲に、獻身努力を續けるとき、其氣組み其心構へは常住不斷の一擧手一投足の些細の事にまで現はれるものである。随つて子女は勿論のこと、使用人まで自然に感化されて、やはり獻身的な氣持になり骨身をおします。人々となるに相違ないのである。かくて其家の中には少しの争ひもなく互ひに相むつみ相和ぎ、毎日毎日愉快に元氣よく積極的に仕事に計畫され實行され、愈々益々興隆の榮えを見るに至るのである。

是れ「色施」に依て精神まで活かされて來たことを物語るものであるが、かくの如く精神が活々と生かされて來たのは「法施」が現はれたのである。

「法施」とは精神的な利益が興へられることに名付ける。一般的の意味では教化とか教育とか云ふものがそれである。随つて學問や道德が社會を益し世を益する意味からそれらもまた「法施」たり得るのである。

更に進んでは人々の心の中に巢喰ふ人生に對する各種の恐怖心を除くところの「信仰」が興へられることは、各種の施の中に於ける最も大なる「施」であつて、之を「無畏施」と名付ける。しかもこの「無畏施」は佛のみよくなし得るものであるとして居るが、信仰は自分の力で得るものでなく、如來の大慈が加被され加祐されて初めて「信」といふ事實が現はれるものだから、私達

最も手近かに體驗され實證し得る「無畏施」は「信仰」より外にはないのである。

「無畏施」が佛のみよくなし能ふものと云ふことには異論はないが、それを雲の彼方にのみ於いて單に想像し空想するだけでは意味をなさない。現實の私達の上に直ちに興へられるものでなくてはならない。

今の「總回向文」の中にある「平等施一切」の「施」は如來様より興へられたるものを我身に受けず、之を他に回らし向けることをさして居るのである。だからやはり如來様の「無畏施」が私達の心を通して全體に行はれるのであると共に、如來様の施は人間を通してのみ最もよく人間に意識され得るのもある。

されば其の「無畏施」の行はれる結果として、私達の上に現はれる心狀は「同發菩提心往生安樂國」の願望ともなり來るものである。

「菩提心」とは「他と共に進まん」とする心である。「上求菩提下化衆生」と云ふやうなむづかしい言葉で云ふと、何だか大相もないやうにも思はれれば、煎じつめて見れば「みんなと一緒にいくなう」と云ふ氣持に過ぎない。何處までも何處までもよくなつて行く。その目的が終に「佛」にまで達する。それが「菩提心」である。然かも自分一人丈では決してよくなれないのであり且つ共同生活をする以上、皆んな一緒にいくなうと

面白くない。つまり何處までも社會性を持たねばならず、よりよき安樂世界に生活しなければ本當でないと思ふのは當り前である。

一體「佛土」即ち佛様の世界の事を一般的に「淨土」と云ふがそれは道德的な意味に名付けたものである。心の淨き世界即ち善人ばかり居る世界の事である。阿彌陀經には「諸上善人俱會一處」と云つて居る。また「極樂」とか「安樂國」とか云ふのは感情の美化されて居る姿を指したものである。常に美しい感情のみで、尖つた感情とか歪められた感情とか云ふものは寸毫もない。謂ゆる「三惡道の名もなし」で欲から来る摩擦もなく争闘もないのであるから、互にむつみ互ひに和いで、喜び樂みのみの充ち満ちて居る感情の美しさを指して名付けたのである。

また智的に云ふ場合には非常に透徹した八面圓明の意味の「常寂光土」と云ふのである。即ち三世を了達し六通自在に、無障無碍の世界であると云ふのである。

かくの如く智情意の最高完全に達した世界こそは、皆な人の共に求むる理想の世界であるが、それを特に「極樂」又は「安樂國」と云つて居るのは、私達人間の心は先づ以て感情が先行するからである。それ等の穿索は何れともあれ、さうした淨土を願ひ求むる氣持になり得た私達は何と云ふ幸せ者であらうか。兎もすれば利己的になりたがり、個人主義的になりたがる私達が、今は當然過ぎる程の氣持を以て「同發菩提心往生安樂國」と回向し得

るに至つたことは、寔に是れ希有の事であり「一大事因緣」の然らしめたものではあるまいか。

茲に注意したいことは「往生」とは汽車が立往生したやうな行き詰りの意味での往生ではない。「往き生れる」と書いてある通り更生することである。更生することは必ずしも身體の代謝するのみの事ではない。私達人間には精神的轉生が随分有り得るのである。親不孝者が親の慈悲に感じて翻然として悔ひ改め孝行を盡す人となると云つたやうなことも精神的轉生である。今まで氣がつかずに居た如來様の大悲にめざめ如來の悲願に感泣する私達の信仰もまた轉生でなければならぬ。「回心」とも「轉機」とも云はれて居るやうに、信仰に依つて心の中核が置き換へられるのが「更生」であり「精神革命」である。

拙ない私が、如來様の中に接取せられた思ひ、それは現在に於ける私の「往生」の姿ではないだらうか。死後ばかりが往生ではない。法然上人も「一念に一度の往生を當て置き給へる願なれば念々毎に往生す」と云つて居られる。古歌にも「彌陀願む人は雨夜の月なれや影見えねども西にこそ行け」と云つて居る。

一步一步と白道を歩むころ。まことにそれは私達の心強い往生の足取りである。よし食欲の水の河、瞋恚の火の河がそのとゞめく怒濤、渴まき猛炎を以て一心を犯して來ても、一路白道を精進して行く念佛者の心こそは、誠に尊い往生人の姿ではある。し

かもそれは一人旅ではない。皆んなと一緒にの道である。諸ろの上善人と共に一緒に淨い生活をして行くものである。おくれたる者、足弱き者を、或ははげまし或はいたはりつゝ共に進み行くのである。如來様の御心のまゝに互ひに回向し回向されつゝ進み行くのである。蠟燭の火の持ち寄りが他を照し自らをも照らしつゝ、その相互の回向が段々擴大されゝばされる程、巨火となり巨燈となつて、愈々明るさが増し増り行くのである。

顧みれば實に不思議である。

初めは單に自分の信仰のことばかり氣にして居て、他を顧みることが出来なかつたものである。云はゞ自利的な氣持でばかり居たのであつたが、何時のまにか、其功徳を自分には受けないで、他の人にばかり振り向けやうとする豊かな身分になり得たのであるから思へば本當に不思議なことである。

謂ゆる信仰の貧困にあらずして、信仰上の富豪になり得たのである。然かもそれが千倍萬倍して還つて來る嬉しさをも享受し得るのである。

こんな大きな利益勘定と云ふものが外にあるであらうか。こんな大きな取り引きが外にあるであらうか。

物質的利益には限りがある。場合に依ては急轉直下大損害を被つて身代限りをしないとも限らないのである。

然るにこの信仰の利益功徳は波及すれば波及する程「捨」の氣

持になればなる程、幾億萬倍して戻つて來るのか其際限も分らないのであるから、實に不思議である。

それはまた「淨佛國土成就衆生」の志願にも合致する。即ち如來様のみひかりを増大することとなるのであるから、正さに「淨佛國土」の行でもあり、また一切に施し一切の人々の向上心を正しき方へ向けしむるものであるから「成就衆生」の行ともなるのである。是れ即ち「菩薩の菩提心」であり「佛心」と相應するものであり「佛作佛行」の一端を現はすものでさへある。

茲に至つて私達は將に「佛子」たるの自覺に達したのである。如來様の子としての自覺に達したのである。阿彌陀經には「皆な是れ阿闍跋致なり其中の多くは一生補處なり」と説かれて居るがかうした十惡五逆の赤凡夫が如來の大増上緣力に引き立てられてともかくにも茲まで進まして頂いたことは誠に有り難い極みでなくて何であらう。また其「有り難い」と感ずることその事が既に「功徳」でもあり、一層の有り難さでもある。

「願くは此の功徳を以て

平等に一切に施し、

同じく菩提心を發して

安樂國に往生せん。」

此文を稱へ得る私達自らを顧みて共に喜び合ひたいものである。

編輯後記

◆歐洲に第二次世界大戦の幕が切つて落された。遂に来るべきものが来たまでである。これを悟らざるものはある時は樂觀論にある時は悲觀論にその去就に迷ふのみ

◆動亂勃發の報を入れて諸株が一齊に暴騰した如きは我が現狀の認識の足らざること甚きものと云ふべきである。さきの大戦當時の甘美なる夢を再現し得るを信ずるものが日本國民の中にかくも多

いと驚かざるを得ない。かゝる認識不足を將來せるものは將して何ん人の罪か？

◆かゝる輕薄な根性には東亞新秩序建設の眞の意味はわかるまい。正しい信仰に根を持った深い認識と勇氣とがこの際切に要求されるのである。佛教徒たるもの一段の精進なかるべからずである。

◆牧少將の「時局下の佛教界に望む」はその意味で好論文たるを失はない。少將は御承知の如くききに淨土宗の得度を受けられた中支戰線の猛將軍、その戦場に於けるまた大陸戰跡巡拜回向によつての體驗に根ざした佛教徒への忠言は深く味ふべきもの。

◆服部覺善師の「廬山紀行」はいよ／＼油がのつて來た。皇軍にとつても蔣政權にとつても色々な意味で因縁深き地たる廬山は淨土宗にとつてもまた由緒の地であることが良くわかる。

◆佐藤賢順師が北海道巡錫の報告をかゝげられた。北海の同信とのこの交歓は本會の發展に相當大きな意義を持つものである。

◆吉田絃二郎先生の「坂根翁のこと」は妙好人傳に新たな天地を開拓したものと好評噴々たるものがある。信仰の書としては稀れに見るものと信ずる。

◆本會出版物の御注文は振替郵便が御便利です。振替口座番號は東京八二一八七番

◆御注文の場合は種類、部數、代價を楷書で明瞭に御書き下さいますやう。尚送料をお忘れなき様お願い致します。

◆勝手乍ら代金引換は一切お断り申上ます。

◆その他お問合せは往復はがきかまたは返信料同封で、御願します。

◆會員で御住所御變更の方は現住所と共に前住所をも御明記の上御通知下さい。

◆本誌掲載の廣告は一切左の店で取扱つてをりますから廣告掲載御希望の向は直接その方へ御問合せ願ひます。

本誌廣告一手取扱

株式 正路喜社

東京市京橋區銀座西七丁目
電話代表銀座 五七六六

淨土 十月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和十四年九月三十日印刷納本
昭和十四年十月一日發行

(定價十二錢)

編輯兼 眞野 正順
發行人

印刷人 赤尾 光雄

東京市牛込區市谷加賀町一ノ二
印刷所 大日本印刷株式會社

發行所 法然上人續仰會

東京市芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番

「淨土」購讀規定

一部定價 金十二錢
(送料五厘)

會費 金一圓二十錢
(送料不要)

一ヶ年

法然上人鑽仰會刊行圖書

東京市芝區芝公園明照會館
振替口座東京八二一八七番

中村辨康著

(四六版一三〇頁總ルビ付)

法然上人の信仰生活

定價三十錢
送料六錢

中村辨康著

(四六版八〇頁總ルビ付)

信仰讀本

定價二十錢
送料三錢

藤井實應編

(增刷出來)

菊半截一四四頁
總ルビ付

法然上人法語抄

定價三十錢
送料六錢

佐藤春夫著

特製ノート型、天金
十二ポ總ルビ、三〇〇頁

法然上人
別傳 掬水譚

定價四圓五十錢
送料二十二錢

中村辨康著

(四六版七〇頁總ルビ付)

講話一枚起請文

定價十錢
送料三錢

大野法道著

(四六版六〇頁總ルビ付)

法然上人

定價十五錢
送料三錢

中里介山著

(三六版二五〇頁クロース裝)

法然上人傳

定價六十錢
送料六錢

佐藤春夫・吉田誠二郎・岡本かの子
倉田百三・都芳隨園著

(增刷出來)

(四六版總ルビ付)

我が信仰

定價六錢
送料三錢

法然上人鑽仰會編

(菊版一一〇頁總ルビ付)

念佛讀本

定價二十錢
送料六錢